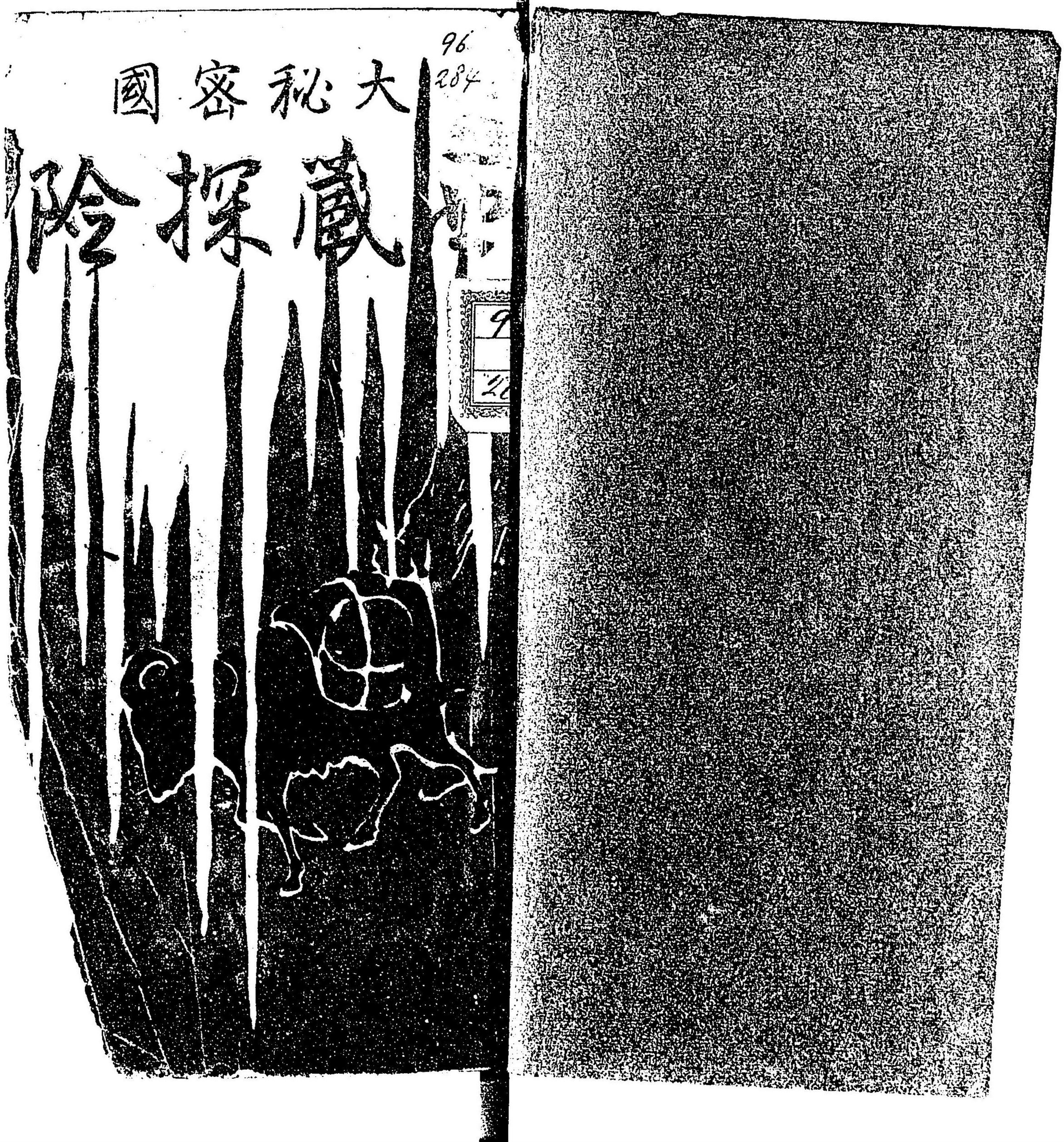
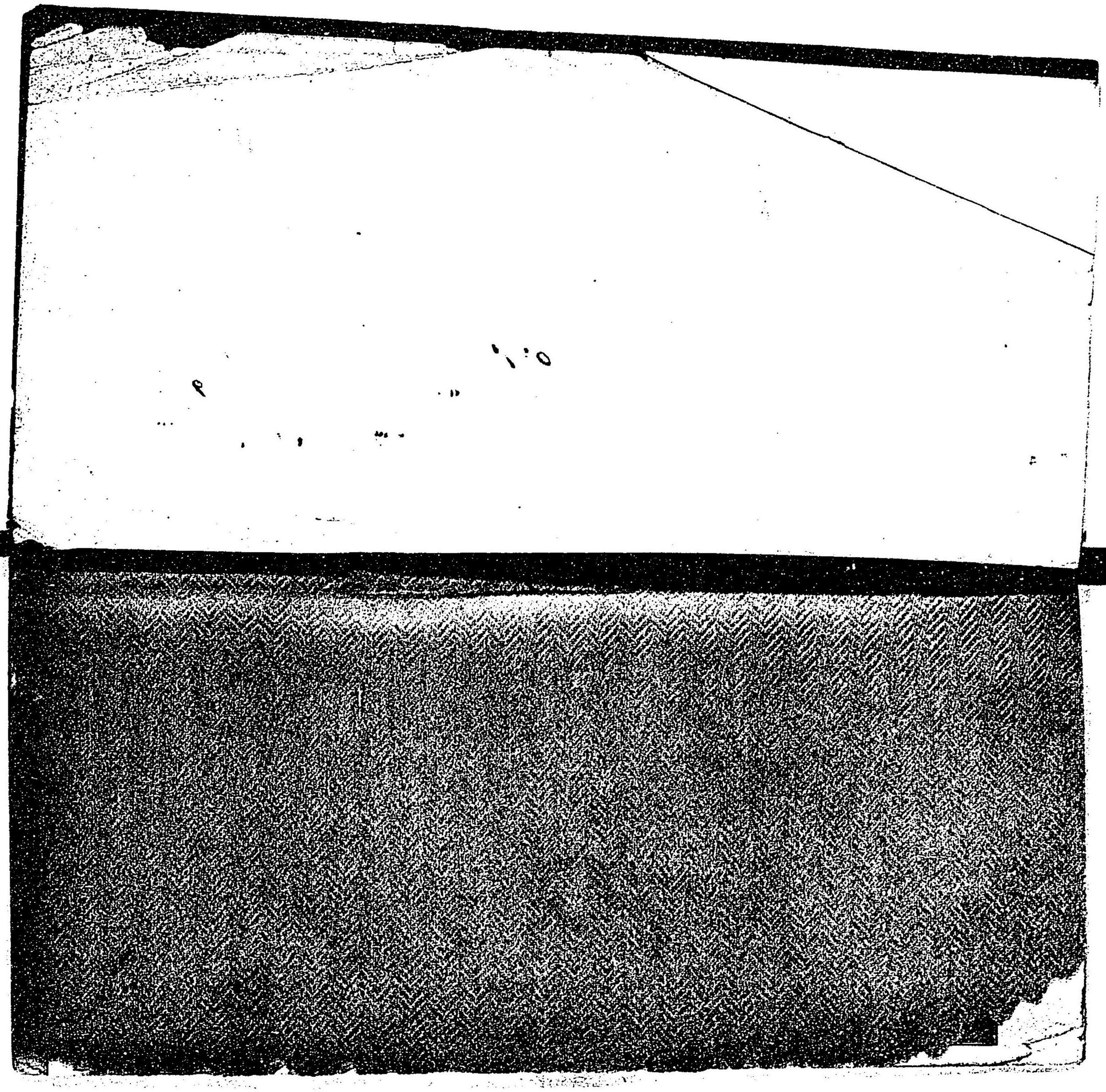
96
284

大秘密國

險探藏





自叙

西藏は亞細亞高原の中心に位す北は崑崙山系を以て蒙古に境し東は高嶺を以て清國の四川甘肅に連り南は比馬拉高峰を以て印度に接し西は漠々たる曠原を以て土耳其斯坦に隣する四面天嶮の還土にして佛教の一宗たる喇嘛教の本國たり元と支那の領土に屬するを以て全國中央政府より官吏を派遣し其地首長たる法王の政教を監督し來るも今や事實獨立の狀態を保ち親交あるは唯南方隣國たるネパールの一國あるのみ而して曾て他國の侵略を被りし以來絶對なる鎖國主義を執り明り他國人の內地に旅行するを許さず故に他邦人にして彼國內の事情を知ること能はざりしが會々泉州堺の黃檗僧河口慧海師獨然雄圖の探險を企てたるもの毎に失敗を以て了り國內の事情を知

明治文庫

を企て挺身其大秘密の境に入り殿寒肌を劈くの虎狼獣搏噬の威を逞ふするの野を過ぎ加ふるに強賊の時に行囊を掠むるの危難を冒して苦辛惨澹具に至り他國人の容易に窺知すべからざる事情を探捜し萬死の中に一生を得て此頃歸朝したり其間る所未だ師の蓄藏を盡さずと雖ども既に奇絶快絶を極め世界歴史の參考に資するもの尠からず各人の知らんを欲する所多きを以て此に予が聽くところ及び有力なる材料とに基き此編を起稿す其如何に奇快にして且つ利益あるかは請ふ之を本編列記する所の各項に徴せよ

著者識

大秘密國 西藏探險目次

第一章 入藏經歴談

○河口慧海師……一
○入藏の目的……三
○旅券交付者の死刑……四
○入國の禁令は愈々嚴密……六
○入藏の準備……八
○懐中無一物……一〇
○釋尊成道の遺蹟……一三
○塔主に出會……一三

○月夜に虎の嘯くを聽く……一七
○舌を出すは最敬禮……一八
○乞食は最大の手引……一〇
○塔主の情……一三
○供の擔夫は兇賊……一四
○兩兇の虎口を脱す……一七
○一厄去り一難來る……一八
○大石を頭ばし踏石を造る……二〇
○毒殺は民俗の迷信……二二
○西方彌陀の秘藏庫に入る……二四
○法王の上位は神の宣託……二七

○一妻多夫(主婦は一家の權利者)……二八
○常食は蕎麥粉……二九
○猛犬と犛牛……三〇
○有難屋の老婆……三二
○衆生濟度の方便を問ふ……三四
○猛獸を避くるの道は强盜の便……三六
○西藏には珍らしき家庭……三八
○世界の名蹟マナサルワ湖……三九
○西藏第一の大河……四一
○活きたる餓鬼となる……四三
○首府の拉薩に入る……四五

○大藏大臣の庇護を受く……五五
○西藏鎖國の由來……五六
○西藏法王の宮殿と宗教……五七
○西藏の文學と幼稚なる印刷術……五八
○財政の運用及通貨……五九
○西藏は世界の寶庫……六〇
○日本人たること發覺(西藏の大疑獄)……六一
○西藏國王へ上書す……六三
○疑獄の落着……六五
○チベール國王の激賞……六六

第二章　西藏內地の事情

○西藏の離婚と姦通處分……六七
○葬式の奇習……六九
○訴訟の裁斷……七一
○西藏人の氣質……七三
○西藏の大祭日……七四
○新年の式事……七六
◎市民の不潔罪　◎大供養會
○佛陀入滅の紀念祭……八〇
○水祭は感謝の宴……八一
○提灯行列と其由來……八四

○喇嘛僧の生活……八五
◎農工商の業を執る　◎足下に死する生者は佛　◎朝の看經
◎身体の臭を七種に變ず　◎喇嘛の墜道者　◎僧侶の俗務
◎僧侶の食物　◎僧侶の服裝
○ラッサの大寺院……九一
◎寺院の由來　◎建築の大要
○西藏の神祕劇……九六
◎祖先は食人鬼種　◎赤虎形の鬼は赤き惡鬼となる　◎劇は國庫の費
◎劇の筋書　◎獅子踊の劇
○西藏の人情……一〇五
◎殺生戒を極端に守る　◎異人の刑罰は極めて峻酷　◎他人を思ふの情深し

○經典に香花を手向く……一〇八
○總ての書籍は宗教臭味……一〇九
◎書籍の種類　◎重要なる儀式錄
○刑の執行者跳躍す……一一一
○國內醫師皆無……一一三
○西藏人の衣食……一一四
○財產は必ず親近者に讓る……一一五
○古代の宗教……一一六
○商業の幼稚……一一七
○西藏人の不潔と健脚……一一八
○カム人の懺悔……一一九

○比較的機敏なる商人……一三一
○巡禮の多きは生活の苦より……一三二
○雪峰の靈蹟……一三三
◎阿彌陀如來の像　◎黃金溪
○靈湖と靈泉及靈坂……一三五
◎マナサルワ湖　◎ランチェン泉　◎解脫冊の坂
○耕作と牧畜……一三七
○國民の財產……一三八
○雇主と被雇人との關係……一三九
○文明的輸入品……一四〇
○馬の飼育方……一四一

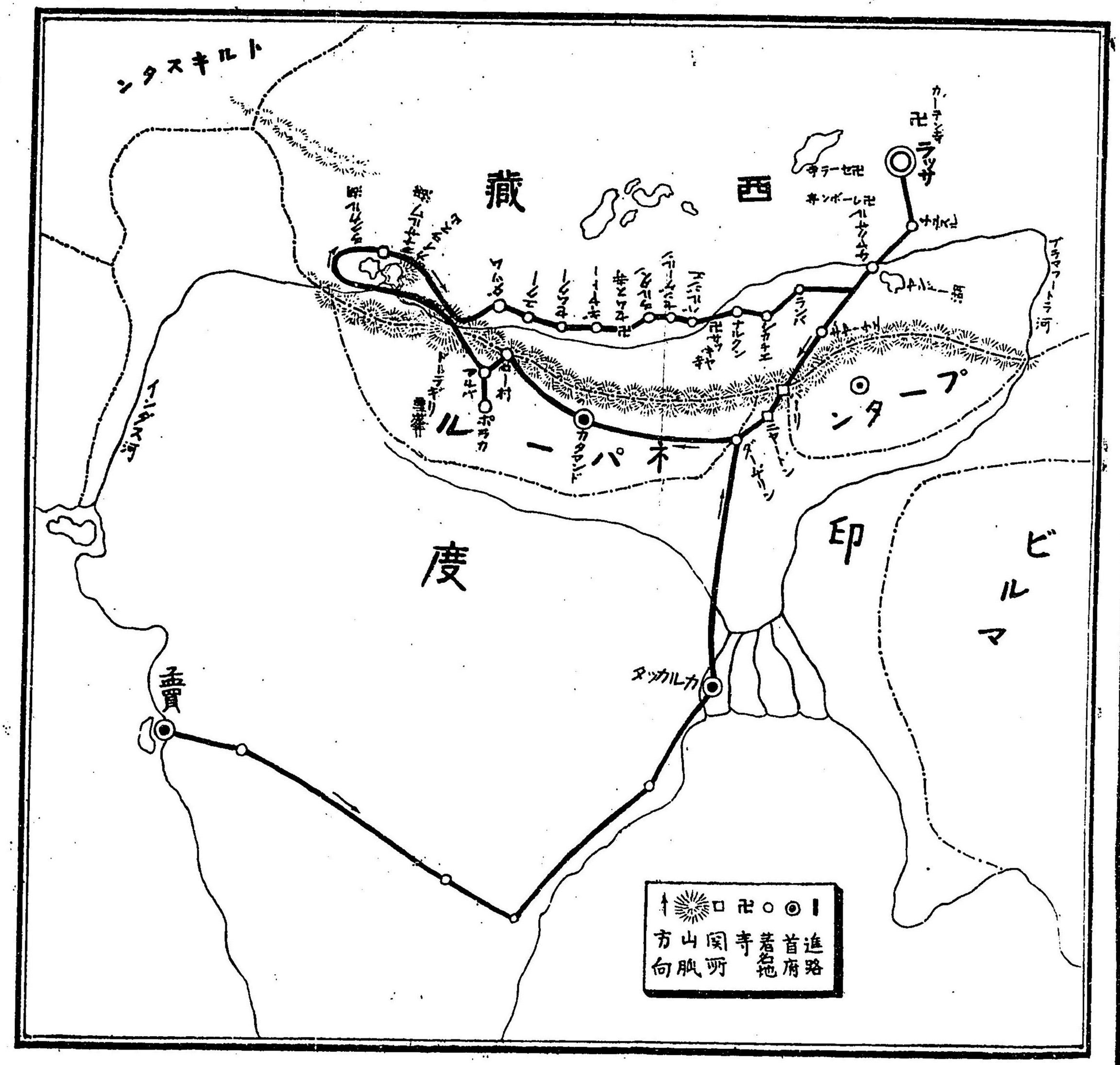
○一切藏經の事……一四二

第三章　入藏談拾遺

○郵船和泉丸中の二客……一四三
○カルカッタの數日間……一四六
○ダージリンに向ふ……一四七
○慧海師が故國に發したる書翰……一四〇
○二通の紹介狀と三大寶……一四三
○セーラ大學堂……一四四
○發覺の原因は貴公子の口より出づ……一四四
○チベット國王より贈られし佛典……一四七

目次

○經論は世界の寶典……一頁
○慧海師旅行中の偶感……一四頁


シタスキルト
西
藏
ラッサ
カーチンギ
ラーセ
ンボーレ
ヤルツムウ
ヤムドク湖
ブラマプートラ河
ナルクン
ランバ
ニヤートン
ダーヂリン
カタマンド
ポカラ
村
ネパール
インダス河
度
印
ビルマ
ダッカ
カルカッタ
孟買
進路
首府
著名地
寺院
山岡
方向
口
卍
○
◎

大秋密圖

西藏探險

河口慧海師談
林　暢谷編

○河口慧海師

師は泉州堺市の出生にて二十五歳の時出家となり佛書と眞言の雲照律師に就て學びたり二十六歳の時東京五百羅漢の住職となりしも讒者の舌頭にかゝりて僧職を剝奪せられ爾後尊皇奉佛大同團に入りて其機關雜誌に筆を執り多少の資を得たるも固より貯蓄をなすの餘裕あらざりしが黃檗保存講の葛藤ありし時相方の間に斡旋して一方より百

五十圓他方より五百圓の謝儀を受くるの約束ありしにまたもや或る娼妓者の爲に離間せられ計畫全く畫餅に屬せり而して入藏の決心を生じたるは二十九歳より三十二歳までの間にありて資金の出處につき少からず心を勞したりしが幸に篤志家の補助と喜捨とを被り讒に旅行準備を整ふることを得て茲に明治三十年六月

久方の月のかつらの折を得てかへりやすらん天津日國に

の一首を殘して決然入藏の途に上り佛天の冥助と不惜身命の勇猛心とを以て萬里の異域に六年の星霜を重ね百艱萬難に打ち勝ち未だ歐米の冒險家と雖ども成効したるものなき四面天險を以て圍はれたる西藏入國の大願を成就し去る三十六年五月中に歸朝せり

○入藏の目的

元來佛敎は耶蘇敎に比すれば高尙の理義ありて安心の地に立つの妙味を知らるゝものなるに日本の中等以上の人士に佛敎を知らざるもの多く僧侶にすら僅に其字を讀み得るも眞味を解せざるもの多し此は佛典が六かしく漢語にて譯されある故にして若し新聞紙の文字の如く何人にも了解せらるゝ樣に記されあれば自然に讀む人も多く佛敎を知るもの多きに至るべしとは師が平生の意見にして此邊より佛典を平易に和譯して一般に弘通せしむるの志願を起せり然れども法華經なり無量壽經なり譯者も一人ならず譯し方もさまゝなれば隨つて意味違ひ其間の取捨に迷を生ず迷は佛門の大敵なり故にまた原文を求めて其を譯せんとの希望を起せり然れども佛の本土たる印度は滅亡

して佛典を存せず獨り西藏には一切藏經ありとの事故其を取り來らんと思ひ立てり印度の俚諺にも印度の黃金は英國に取去られ佛典は西藏に持ち行かれたりとの事なれば西藏に入るの志願を起せしなり印度の梵語經文は西藏にもヂバールにもありとの事なり西洋學者も漢譯は駄目なり西藏譯は完全なりと云へりされば如何にしても西藏の經文を取り來らんと思ひ立てり云々とは師が自から語るところにして即ち師が最初西藏入國を決意せし原因なり

○旅券交付者の死刑

然れども西藏に入國するの困難なるは未だ世界各國中完全に內地の探險を遂げたるものなきに依り想像することを得れば師は先づ印度カルカッタに航し同地佛敎會幹事

ダンゴロサン氏の紹介に由りてダーヂリンにあるサラット、チヤンダラダース氏の許に抵りしに氏は西藏人に對する手段として英國政府の內意を領し語學及び測量學を專問とせる一の學校を創設し西藏人に限り總て無月謝入校を許しなは例へば百人の生徒中其十人を選拔して之を校舍內に寄宿せしむる特典を與へて大に其養成を努め又同敎師には二三の西藏僧の聘せられて敎鞭を執れるもあり就中一名の西藏僧はライバドル師と稱し元來シッキム人なるも夙に旅行券を得て西藏に留學したる經歷を有し又サラット、チヤンダラダース氏も去る千八百八十一年中苦心の末漸く旅行券を得て西藏の第二首府なるシカチエーに潛行し同所に三個月ばかりも滯留して英國政府へ宛て其入藏の次第を報告し更に又醫業專問と稱する名の下にラッサ府に入るべく旅行券を得て十個月間許り滯在し其實況を英國に報告するや同政府は氏の功を賞し從來百ルピー

の月俸を忽ち三百六十ルピーに引上げたり然るにダーヂリンの土人は氏が入藏探險の成効の結果一千ルピー以上の增俸を受けたりと噂し從つて何人が國禁を犯して彼に旅行免狀を交付せしやの詮索はいよ〳〵嚴重となり同時に氏のシカチエーのタシレンプーに居たることさへ顯るゝに至り之が爲に同地にて氏が敎を受けたる大獅子金剛寶師は死刑に處せられ又旅行券を交付したる官吏三名も同じく死刑に行はれ且其宿泊したる家は悉〳〵財產を沒收せられたり

○入國の禁令は愈々嚴密

由來西藏は絕對に鎖國主義を墨守せる國柄なるも唯だ其一方の國境たるチベール國とは常に親密に交はり又チベール國にありても他國人の同國を經過して入藏するものあ

らんとする場合は互に交情を重んじ故なく入藏せしめざらんとするの風あるが故に外來人の同國に入るさへなほ容易からざるのみか前述の大獅子金剛寶師を始め當局官吏等の端なくも彼のサヲット、チヤンダヲダース氏の爲に多少の便宜を與へたるものの等の總てが死刑に處せられてより西藏入國の禁令はいよ〳〵嚴重となり即ち外人を導くものは捕へて死刑に處すべく又外人の入國を探知して報ずるものへは特に恩賞を授くることゝせり然れば何人と雖ども西藏の國境を越ゆべからず多年此入藏行を企てたる外國人は其數少しとせざるも往々行途にして危難に遭遇し終に身命を失ひたるは多きも事を遂けて歸來したるは稀少にて先づ皆無といふも差支なきが如しと師が入藏すべく決心してカルカッタ市を去りダーヂリンにサヲット、チヤンダヲダース氏に就きしは西藏語を習得し且其入藏の用意を詳悉し得るの便宜を乞はんが爲なりきと

○入藏の準備

依てサラット、チヤンダヲダース氏に入藏の希望を語りたるに氏は誨へてこれを中止せしめんとしたりき然るに師は言へるやう此行を中止せしめんとするは長途の危險を憂慮して誨ゆるの好意を深く感謝すと雖ども余は斷じて中止せざるべし既に先生は入藏を遂げたるにあらずや先生も人間なれば余もまた同じく人間なり焉んぞ不可能のことあらんと此に於て氏は更に日本人の性格の斯も堅忍不拔なるかを反問し快よく肯諾を與へつ然らばとて奇縁にも師と同名の蒙古僧慧海師を介して師のために教授の勞を執らしむることゝなりしかば即ち同師に就て學ぶことゝなりしと尋で又俗語を研究するに當り更に又サラット、チヤンダヲダース氏に乞ふところを以てしたるに氏

は之を諭して家族を伴へる西藏僧あり速に之を招致してラシヤヘラの別莊を貸與すべきにより君も同居しては如何と言へり師は幸に西藏僧及び其家族と同居して西藏首府の俗語を實習する便利を得たるが其家族を同伴せる西藏僧は名をシヤムヅウンと稱し曾て彼の外人を敎戒し國禁に觸れて死刑に處せられたる大獅子金剛寶師第一の高弟にして先師と共に一旦獄中に投ぜられしも獄卒に酒を賂り爲に虎口を遁れて生存するを得世に有益なる藏英辭典を編輯するに至りし有爲の人なりと斯くて師は專心に西藏の俗語を研究練磨し滿一箇年にして西藏語の會話に支障なきを覺へたれば愈々入藏の意志を鞏固ならしむると同時に西藏內地の事情も略ぼ想像し得らるゝの心地せしを以て最早西藏行の時機到來せりと思惟し去る三十二年一月五日といふに蹶然起つてダーヂリンを出發し表面本國に歸ると稱して一旦故らにカルカッタに引返し全然入藏

を斷念したるの体を裝へり然れども師は斯くして一時人目を避けたるのみ若しもダーヂリンより直にチパールを經て入藏の途に上らんか其地に流浪せる惡漢中忽ち師を捕へて訴へ出で政府の恩賞に預らんと欲するものゝ出でん憂あり依つて敎師始め同居人の總てが酒を好むと聞けるを以て師の肉酒一切を絶ちて之を喰はざるも他に饗應し懇に別を告げたるにてカルカッタ府に入りたる後再び出發の用意を取急ぎたりき

○懷中無一物

偖て西藏に進入する行路は可なりの道三筋あり第一に完全なるはコヤートンにして但し此の道筋には五箇所の關門ありて通過すること甚だ困難なり又ブータンの東にも二三箇所の間道あり又カンチヤンセンガの西にも同じく二三箇所の間道ありて皆可なり

の道路なるも而かも是又二三箇所の關門を備ふブートンより進むは好けれども此道筋には食人種の野蠻人多く住みて金品を懷中するものは假ひ同族たりとも殺害を行ふチパールより進む道筋の住民は性質も多少温良にて殊にチパールは釋迦の修業せし舊蹟其他著名なる故蹟も數多ある由なれば此道筋より進行を始むるを得策と考へ師は斯く道路の研究をなして藏語の修練を續け遂に西藏語を以て說敎し得るまでに上達したるが此に一年半の歲月を費す内に懷中せる金は殘らず空となりたれば師が折角の入藏旅行も或はそれが爲に廢止せざるを得ざる哀れの運命に瀕したる折柄恰も好し阪堺の親友若くは信者より送金ありたるに由り漸く蘇生の思ひをなし愈々出發するの幸を得るに至れりと而して師は若し其際送金の到着なかりせば進退維れ谷まりて滿足なる旅行を遂ぐること到底難く今日の幸福は全く親友等の庇蔭なりと言ひ居れり斯くて師

は前項記載の如く盗賊の追躡を避くるが爲に歸國と稱して一旦カルカッタに歸り再び行李を整へ佛陀迦耶に向け出發せり

○釋尊成道の遺跡

佛陀迦耶は釋尊が初めて成道せし所にして世界第一の佛教の舊蹟なり其處に大なる菩提樹ありて樹下に一箇の金剛坐あり即ち釋尊の悟道したる所なりなほ周圍には釋迦の散歩せし所ありて足跡ある靈臺もあり師は其金剛坐に上りて坐禪を組みたるが釋尊の其昔時を追懷して誠に感慨に堪へざるものありきと人は師の金剛坐にて坐禪せしことを聞きて喫驚するものありしも而かも師はこれを不思議となさず釋尊も其始めは全く俗物なりとの意見を漏せり斯くて師が乘れる滊車はセゴリーの停車場に着きたり其處

は滊車の終點にて徒歩一日程にしてチベールの國境に到りしが茲に第一の困難は師のチベール語を知らざりしことにて爲にセゴリーより進むこと能はずしてチベールに入ること能はず止むなくセゴリーの旅宿に投じ滯留してチベール語を研究することゝなれり

○塔主に出逢ふ

師はセゴリーの驛にて其地の郵便局長を訪ひ手帖會話を試みつゝ一週間許りも滯在し爲に多少の得る所はありしと雖ども未だ甚だ不充分なるを慮り兎やせん角やせんと打案じける折しも或る日セゴリーの停車場にて年齢四十位の人と六十位の人の從僕を伴れて下車するを見受けたりしかば是れ屈竟の導者なり就て旅行の便宜を得ば幸

なりと思ひ茲に一行と言語を交へ西藏の首府ラッサより來る旅行の支那人なりと名乘れば該商人の一行は北京官話にて談話を始めんとはしたりされど師は北京官話を操らず故に唯た簡單に福州に生れたれば北京官話を知らず西藏の言語にて應せんと言ひしに彼等老人の一行は何となく怪訝に堪へざるものゝ如き素振をして口を開きて師に一種の試驗を始めたり其は汝が首府のラッサ大學に留學せしときの教頭は誰なりしや今又如何なる目的にて此地方を旅行せるやなど意外の問題は提出せられたり然るに師はダーヂリンに年餘の苦學を積みし賜とて幸に西藏の内情より言語を知覺し居るものから難なく一行の問に答へ且つ旅行中に於てカタマンドーなるマハボーダ大塔の塔主を訪はんと欲する旨を告げ又爰に其地にてチバールの大書記官ラッパードル氏より受けたる紹介狀を示せしかば老人は之を見て此名宛の主は自身なりけるよとて尙はも

海陸何れよりして此地に入りしか又カタマンドーに達するまでには前途には關門あり此關所を通過し得べき書面を携帶せるかなど五月蠅も反問するにぞ師は始めラッパードル書記官に會見したる際同書記官の支那人なりと認識してそれ〳〵交付し呉れたる旅行券及び紹介狀等を老人に示したれば此に於て老人の不審は全く氷解したるものゝ如く然らば是よりカタマンドに同行すべし左るにても車馬何れを取らんか道路は危險なりと雖ども歩行せんとならば即ち可なり行々支那の佛道を聽くもまた興あらんと爰に初めて該商人は西藏の大博士なることを覺りぬ師は圖らずも途に其塔主に會するを得たるを喜び歩をカタマンドに進めたり一行は從僕を併せ十名計りとはなりぬ即ち用物は悉く從僕に携帶せしめたるが途中にて從僕の携帶せる用物を掠奪せんとしたる盜賊ありしにぞ此は油斷なり難しと一同相戒めて宿舍に就きたるが改め見れば

師の用物は幸に無事なることを得しも博士の財函一箇は從者の油斷を窺ひ盜み去られたるなりき函中の在金は僅に三百六十「ルピー」に過ぎざりしも師が甚だ氣の毒に堪へざるを言へば博士は之を以て前生の借金なりと悟了し尠しも愛惜の念を現はさざりきと

○月夜に虎の嘯くを聽く

これより博士と師等の一行は互に警戒を加へ遙かに雪山を望みて大森林に馬蹄を埋め行程四日計りにしてビルガンヤと呼ぶ處に達したり師は其處にて新に入國旅券を得ざるべからざるが幸に大塔主の一行に在りし故を以て容易く旅券の交付を受けそれよりガヤに入るを得て西大谷新法主の一行に出會ひ共に行旅の困難なるを語り合ひて衣

の袖を別ち又々行程一日にして鐵脚は正に猛虎、吼獅さては毒蛇の棲窟と聞けりし全世界の高嶺比馬拉の山口に踏みかゝりぬ其地は印度にてタライヤヤンガルと呼びチベールにてはピンドラバンと稱せり更に歩を進むること四五里計りにして平坦たる大森林に差かゝりたり此れぞ所謂比馬拉の玄關口ともいふべく其山系林脈蜿蜒恰も帶の如く東は緬甸より西は阿富汗坦の境に連り苟も鐵脚を雪嶺の地に容れん欲するの旅客は是非とも第一に先つ其大森林を越へざるべからざるなり而して師等の森林を跋渉せしは行程七約二十餘里なりしが其行程一里を距る毎に鐵管を布きて造れる水溜池あり這は行旅人の掬ひて渴を凌ぐために特設せられたるものなりと或日師は其山中よりピチヤヤリ川に臨みて深夜大空に月の凄さまでに冴へ渡りたるを仰ぎ見つゝありけるに猛虎のおどろしく嘯くを聽き左の作あり

月清しおぼろに嘯く虎の音にピチヤヤリ川の水は淀めり

斯くて師の一行は漸々進んでピンピチーに達しチスパニーの險坂を攀ぢ上れば絶頂に一の稅關ありて旅具旅券の檢査を行ふ其絶頂の瞰望に至りては到底言語に盡し難き景色にて比馬拉の峰嶺は白雪皚々として聳へたりそれより下阪一日程にして又々月峰と呼ぶ山峰あり頂上より望めばチベールの平原雲漠々恰も我比叡山より山城の平原を望むに似て廣袤の幾何あるを知るべからず漸くにして第一の彼岸なるチベールに入國するを得たりと、

○舌を出すは最敬禮

師等の大塔主に從ひ國境に下るや門徒の老幼馬に鞍して塔主を出迎へ師にも其馬を進め

められしかば之に跨りてカタンボーなる迦葉波の大塔に入るを得て一行と共に塔中の人となれるが師は飽までも本音を吹かず唯だ初めての問に答へし如く支那人なり福州の僧侶なりと主張して居常の行動を慎み素より肉食を絶ちたりしかば殊に其地舊教派より信用を置かれたりと抑も迦葉波佛を安置せる大塔は國内唯一の大塔にて國王の歸依厚くそれゆへ土俗塔主を稱して國王の僧なりと敬仰し又西藏の貴族も官吏も僧侶も俗人も踵を接して其大塔に到り禮拜するを古來の慣例となし殊に我四國遍路、西國巡禮の如く靈趾靈佛を巡拜する男女の乞食は實に五月蠅も群集して行人に對する毎に最敬禮を行ひ金錢を乞ふもの引きも切れず其數を知る能はざるほどなるが扨て彼等が行人に對する最敬禮とは土俗の風習として無闇に舌を出すにあり舌を出して人に對するを其國の最敬禮となせりと師は彼等憫むべき總ての乞食が人に厭はれ絶對に排斥せら

れ居るにも關らず一々其敬禮を受け且つそれ〳〵彼等に接したりしかば塔主は師に注意して彼等の乞食中には心善からぬ輩打ち交り居りて旅人の行李を奪ひ去り又懷中を掠めんするものあれば努め〳〵油斷すべからずと言へりと

○乞食は最大の手引

然れど師は其等多數の乞食巡禮こそ西藏の地理にも精しかるべく我爲の道祖神と信じたるが故に努めて懇親ならんことを希望したりき依つて師は乞食に誘はれて附近の墟塲を探檢しなは機に觸れ時に應じて乞食を麾さて其となく密に西藏に入るべき要路を問ひ試み汝等は西藏より來りし巡禮なるに能くも無難に其國境を出入することよ西藏の國境には數條の道路ありと雖ども一として關門を設けざるはなし然るに汝等は唯

だ巡禮と認識せられて其關所を通過し得るや如何必ず歩み慣れたる間道を取りて出入するに相違なかるべしなど斯く問ひ落しにかけたりしかば乞食等は豫て師が入藏の順路として打ち案じ居たるチベールよりニウラムに入るべき一線と又餘り長距離なれどキルンに達する一路の外シャルコンビに取る最も近き一線及び印度ヒムヲの方面を迂回して西北に「マナサルワ」湖への一道あることを確かならしめ且つ大々的に迂回して其「マナサルワ」湖に向へば一の間道あり我々巡禮は道途の遼遠なるを厭はざるにあらねど容易く西藏に出入し得らるゝの便利あるを以て此間道より往來するを最も安全なりとするなど語らしめ茲に始めて師は安全なる間道あるを知り縱し道は如何ほど遠かちんも其間道を越ゆるに如かじとの決心を起せり

○塔主の情

抑も「マナサルワ」湖の地たるや海面を拔くこと實に一萬千六百尺と聞く世界最高の靈湖にして印度語の阿耨達池とて印度四大河の源泉を爲し流れてインダス、シタブラワ、ブラマプトラー、ガンヌスの四川を作るものとし佛教の淵源とせらるゝが故に佛徒の其靈湖に詣づるものは幾んど皆無ともいふべき有樣にて土俗は果して其處に抵るものあらば忽ち仙人と化すべきを言ひ傳へ尊信し居れりと斯の仙化こそ師がカタマンドーを辭してロー村より入藏を決すべき最好口實の材料となりぬ卽ちブッダバッザヲに就て「マナサルワ」靈場坐禪の願望を話したるに井は至高の志願にして余も亦數次心に希ひしことあるも妻子の係累に拒まれて終に絕念するに至れり湖畔のカイラス山は

往昔聖僧セッシヲチバの靈驗を顯はせしを以て有名なるも爾來一人として斯の靈地に修禪を遂げたるものあるを聞かずとて陰かに大願を斷念せしめんと努むるに似たり師もまた此際强ひて之を主張するの不利なるを察し機を見時に應じて數次之を說き終に塔主たる博士をして眞個畢生の心願たるを確信せしめ爲に頗る途次の便を與へらるゝことを得たりき靈地修道の議既に決したればブッダバッザヲは師が爲に僮僕一人擔夫二名と白馬一頭を周旋し別に六十路に近き西藏人の老婆を道案內に附せられ主從五人無事ロー村に向ひ發程せり蓋し老婆は西藏チバール間の巡禮を以て生涯の業となすものなれば塔主に於ては陰かに師に對する探偵として隨行せしむることになしたるなり偖て夫より逐次步を進むるに比馬拉雪嶺の壯觀は無數の峰巒と溪谷の趣致秀絕佳絕にして到る處皆特殊の景物を具へて言の盡さるべきにあらず其電雷霰霰の襲來する時

其洒然として霽れ渡れる變幻萬化する活趣に至りては更に快哉を呼ばしむ其間牧童の胡笛を弄する群雀の澤畔に遊べるなど自から畫中の人となれるを覺へず殊に皚々たる雪嶺の半面滿目爛漫たる山躑躅花の相映ずるあり土語に名けて「ロードーレンドル ン」花と稱して花蕚蕊生相追ふて開瓣し殆んど三箇月の長きに及び稱して比馬拉の花となす斯くて師はカタマンドーより十三日にして漸く第二の都府ポカラに達するを得たるが時方に桐花の滿開に際し民家多く六角屋を做ひて恰も我國の亭に彷彿たれば坐に望郷の感に打たれつゝ之より徑路を取り漸く北に向へり

○供の擔夫は兇賊

師が被天禦地の旅路に漸く日を重ぬる内道案内をなせる老婆の擧動は常ならず何事を

か告げんと欲する秘密あるが如くに察せられたれば師は一日事に托けて老婆を先發せしめ而して後また擔夫等に單身探勝の愉快なることを告げ獨り馬に鞭ちて密に老婆に追及し雜談の餘其語らんとする胸中の秘密を吐露せしめしに何だ圖らん是ぞ渠二擔夫の竊に自身に危害を加へんと陰謀しつゝある驚くべき胸中の秘事にて彼の言へる樣師は知らずやカヽ人の習俗は富人を害して其財を奪ひ巡禮をなして自己の罪を滅するものなるを地方の諺に「人を殺さゞれば食を得ず、寺を巡らざれば罪消ゆず、人殺しつゝ寺巡りつゝ進めよ〳〵」といふことあり殊に兩人中一人は曾て殺人の大戒を犯せしことあるは妾の熟知するところなり今彼等の從順を裝ふもの先づ師をして充分油斷なさしめ置き其北原に入るを俟つて罪惡を遂行せんと期し居れるのみ是れ妾が經驗上渠等の擧動を察知し得るのみならず既に兩人の話柄中にも數次耳に入りしことなり

師希くは妾が忠言を確信し速に機を見て渠等山賊を放還せよ而して斯のこと妾が口より漏洩せるを覺らば妾の命も亦渠の兇刃に犧牲たらざるを得ざれば渠等を放追する前妾にもムクデナードに於て暇を賜はるべしと是を聽て師は一笑殊更に言を柔げ左る惡人の現世にあるべからざるを說き試に之を打ち消したるも老婆の證言いよ〳〵懇切に赤誠面に溢るゝ許りにて毫も疑ふ節なければ兎に角其好意を謝し置き表には虛氣を裝ひ裡には脫難の好機を考へつゝなほも同行路を繼續して漸くトクヂエー村の「ハルガマンスツバー」邸に安着するを得たりと

○兩兇の虎口を脫す

「ハルガマンスツバー」はトクヂエー邑一帶を管理する大家にして主人亦頗る篤實の性

なれば師は其處に數日間滯在して長途の疲勞を慰し亦傍ら逃難の機をも計らんと決心せり即ち先づ從者を勞らはんため若干の錢を與へければ擔夫は直に走りて酒店に暴飲し兩者漸く亂醉の境に入りけん喧騷暴語を以て互に爭をなし果ては各自胸中の秘密をも口走りて鐵拳を振ひ相搏擊するに至りぬ聽て一人逃げ來りて師の面前に禮拜し訴ふるに他一人の殺意あること及び自身も併せ害せらるゝに至るべきを以てせしかば之を見たる他の者も亦續き來りて更に己れの害心なきことを辯護し却て其非謀を前者に歸して之を爭ひ此に再び相讒罵し相搏擊するに至り而して互に同行の危險を告げて孰れか一人を解雇歸還せしめんことを强請したるは頗る滑稽なりきと而かも師は是を天祐の好機と獨り心に喜び老婆も亦兩人の背後にありて機會の逸すべからざるを目示せるも師は渠等の常慣として一度放たるゝも財囊れは泣て再び追蹤するものなるを

知れば乃ち兩人をして佛誓を行はしめ且つ一人を解て他を置くの人情ならざるを諭し共に約束の賃銀を與へて始めて兩兇の虎口を脱するを得老婆もまた此際無事に他に立ち去らん願望なれば是にも袂を分ちつゝ師は單身今後の旅路を計畫することゝはなりぬ

○一厄去り一難來る

今や師は漸く探檢に熟し來れば旅伴の計畫にはさして苦難を感せざりしも一厄去りて復一難の來るぞ是非もなき幷は入藏に數多き難關中唯一の血路と恃み設けたる「レー」、「マナサルワ」の間道も某英人の爲に探見發覺せられたることありとて三個月前より數名の兵士を駐劄せしめ警戒頗る嚴重なりとの一事なりき師が種々に案じ煩ひ居

る折柄偶々セーラブ、ゼリサンなる僧の醫師としてトクヲエー村に來れるを聞けり其僧は蒙古の出生にて曾て西藏の「セラ」大學を卒業し頗る佛學に精通せる者なるも道心堅固ならずして數次女色破戒の失行ありしより終に嚴格なる鄉里に歸る能はずして當時チベールの山間チヤーラン村に永住の身となれるものなる由を知りたれば師は亦渠を利用して入藏の一器械となすに足るべしと決心し乃ち會して其人物試見を始めぬ師は例に依りて南清福州の產なれば北京官話に熟せざるを言ひ「ラッサ」語を以て谷方面の問答を試みたるに彼僧案外の秀物にして深く修辭學に精達し經論より密部に至るまで殆んど通せざるはなく殊に支那と印度兩佛教の比較論に至りては確かに專攻の價値を有せり且僧の赤貧は利を以て誘ふに足るべきを察し此に師は一策を案じて志望を協議せり其は余はチユミンヤヤーチヤの靈場拜禮を祈願する者今幸に貴僧の卓說を

此に拜聽し其余が志望を裨益するもの甚だ多きを知る貴僧若し直にツァーヲンに還らんとならば冀くば余を伴ひて當分の間寄寓を許し幸に就て斯學を研修せしめよ余もまた聊か自ら修むる處を以て師の參考に資し且一箇月二十留の謝禮を呈せんと言へば僧が意果して動き喜んで其應諾を得たれば乃ち師は同行してツァーヲンに赴き此に竊に間道の研究と超境の機會を俟つに決意せり

○大石を顛ばし踏石を造る

トクセーとツァーヲンの間ムクテナードの名蹟あり是は往昔マハシバーの嫁殺害せられて其首を此處に納めたりといふ所にて觀世音菩薩などを祭れる伽藍は結構壯大輪奐の美は人目を驚かし堂の周圍には百個の瀧落ち其内部は火山作用にて火燄及び瓦斯を

發生し娟爛として瀑泉に映ずる所恰も火の車水の燄を見るが如く壯觀極りなく印度教法の巡禮常に跡を絶たずといふ比馬拉の溪谷是より更に嶮崖を加へ漸く道を分ち難し一日細溪の橋落ちて途絶てるに遭ふ水幸に淺く白砂の洒々として流れ行くを見たれば師は直に一鞭を馬に加へて之を渡らんとせしに馬腹深く沒して始めて砂下に泥澤あるを發見せり顧みて對岸との間隔僅に五尺に充たざれば自ら躍つて岸に上りたるも憐むべし愛馬深く泥陷に沈みて復起つべからざるが如くゼリサン博士は絶望の餘り斷念して引還さんと欲したるも師は三間に越へざる細流に屈するの勇氣なきを慨し博士を勵まして共に〳〵山上の大石を顛ばし投じ午より申の刻に至りて終に一條の踏石を造り無事渡ることを得馬もまた投石に驚きて既に先づ彼岸に游ぎ着きたり斯くて一行はツァーヲンに達したるが博士は師のために其佛堂を貸與したれば是より十一個月間

毎日六時間づゝの講演を聽き益するところ尠からざりきと、其歳十一月某日師が書齋にあるとき一陣の金風芳薫を送りて爽快なること言はん方なく忽ち窓を開けば滿溪の蕎麥雪よりも白く而かも海面を拔くこと一萬四千尺の山上斯かる絶景に遭ふ雪山道人の號は此時より自稱したるにて

あやしさに薫る風上眺れば花の浪立つ雪の山里

ツアーヨンの滯留は師が宿志遂否の境界百溫一冷の土俵際なれば其行動に於てまた其工夫に於て更に慘澹を極めざるべからず博士との研修は前三時間を復講及び豫修に後三時間は之を正講に割當て別に各種修辭の時間を要するを以て毎日未明に床を離れて夜は三更比で眠に就く能はず日曜には必ず出でゝ村民間に交際し密に入藏の逕路を發見せんことを力む其刻苦精勵と碎身計營は爲に師の頭髮を白からしむるの感を起さ

しめたりきと而して師が肉食禁斷と一日一食の力行は深く博士の信用を固めたるが如く淹留十一個月の長き曾て入藏の心緒を疑はしめたることなくさればこと博士の平常勞働と修禪とを主義とするに對し師が講學の他餘念なきを見て「ナスクラーマ」の稱號を與へられき蓋しナは食、スは寢、クは吐を意味する西藏語にして佛は之を無心修業と稱し印度語に「ナルヴロルパー」と名くるものなりと

○毒殺は民俗の迷信

師は日曜日毎の村民交際中にも多種の材料を獲得して終に十個の間道あるを發見せり然れどもまた一種恐るべき比馬拉民俗の迷信あり卽ち旅人の智勇富貴なるものを殺害せば其者の智勇富貴は直に自己の身心に類化すべしと確信することにて一種の毒藥を與へて自然の落命を謀ることと往々聞く所にして該藥は毒草毒蛇より製劑し嚥下するも

即死するの奇効なく早きは兩三日遲きは五七日後に鴆毒漸次滿身に瀰蔓して終にのたれ死に斃るゝに至るものなりと左れば師の一身に取りては天賜の便路此に探究し盡せるも更にまた人爲の危險代りて發生したる道理にて師の苦心慘澹は誰か能く解するものあらん師籍に以爲らく佛教の比較的に隆盛なる地方は毒殺の危險も自ら稀少なるべし縱し遂げずして遭害せんも是れ所謂道のために死するものといふべく焉んぞ一命を惜むべき將たまた以上の好路なくばそれまでのことなりと決意しいよ〳〵ドウラギリー雪峰の險を冒しックセーアルバを經て西藏に入るの策を確立せり

○西方彌陀の秘藏庫に入る

然るに師がツアーヲンを去るに就ては如何なる辭柄を博士に與へ得べきや東向の足跡

に因りて村民に入藏を疑はしむるは更に危險の甚だしきものなりと思惟し此に於て師は一計を策し一先づ故郷に歸ると稱し再びカダマンドーに引き返し同地より旅裝を變じ輕騎越境の覺悟を定め其由を博士に語りいよ〳〵三十三年三月五日を以てツアーヲンを辭し去り更に六月十二日一僮僕に八貫餘の食糧旅具を擔はしめ極めて秘密にカダマンドーを發して藏途に上りしが偖て草鞋鐵よりも堅く決心石よりも硬く海を拔く二萬六千八百呎のドウラギリー山は師の膽心をして更に雄壯活大ならしめ兀々たる無數の雪嶺は三伏の炎天皚々として鐵脚を沒し越ゆるところの山逕高きは二萬二千尺を下らず三旬の行程數百里の高原皆是れ無人境師と語るものは獨り變幻美妙非情無爲の自然界ありしのみ何たる痛快將た何たる壯嚴ぞや終に能くドウラギリー峰を越へックセーアルバに達したるは仝年七月四日にして是より東方積雪深く印度に在りてなは

二尺なりしもの西藏に入りて將に三尺なりさと夫の僮僕はツクゼーアルバに至るの前既に歸還せしめたれば今や師は鐵骨自ら八貫の重荷を脊にし天下の危險を排し天下の大險を跋渉して始めて西方彌陀の秘藏庫に忍び入ることを得たり

○法王の上位は神の宣託

西藏は全くの佛教國にして一人の法主アリて國權を掌握す現時の法王はトブテレギヤムツオーとて聰明の聞あり法王は觀世音菩薩の化身なりとし生き觀世音として國民より信仰せらる法王遷化することあれば暫らく法王の椅子空位なることあり此時に於ては宰相の位置に立つ人代理して國政を料理す法王はまた更に他に再來すと稱して之を法王の位置に据ゑるなり是れ即ち乳兒にして其位に上ることある所以なりと而して

法王の再來なるを知るには豫言者なるものありて其豫言者に神の宣託あるなり由來西藏にはサムギヤル、サムヤエ、ツアンパ、他の一神(不詳)の四神あり此四神は法王の守護神にして法王遷化の後の法王の再來を知るも此四神の告げるところに據りて定むるなり然れば時として四人の法王候補者あることあり斉は銘々神の告異ある場合に生ずるものにて此場合には其四人の内より王を撰擇するの法あるなり而してまた法王は勿論文武其他百般の權を統轄し其下に宰相あり宰相は一人にして外に宰相を佐くる者三人あり皆我古代の藤原氏が攝政の任に當りたるが如く其家皆昔者功臣の後胤にして勿論世襲なるがなは此四家の外に二三十戸の所謂貴族なるものありと官制より言へば宗務省、司法省、大藏省、陸軍省の四省あり宗務省は國政一般の宗務を掌どるところにして權力頗る偉大なり皆僧侶其職を執るなり司法省は法律其他一切の立法權及び

司法行政の權をも掌どるなり大藏省は勿論財政の事に任じ陸軍省は軍隊を統ぶるところにして敢て他國と異なるところなく目下軍人は國内に五千人許ありと

○一妻多夫（主婦は一家の權利者）

一妻多夫は其國風にして一家五人の男子あれば一人の妻を迎へて五人皆一妻に據る兒生るれば其誰の子たるを問はず必ず長上たる兄の子とし他は其兒に對し叔父の位置に立つなりと兎に角概して一家一妻の風なれば其家に寄食する男子は其主婦の命令に從はざるべからず又明友相集つて仲間に一妻を娶ることあるは其婦より我れの家に來ませと招くといふ風にて其招かれし男は即ち其主婦を妻となすなり斯の如くして主婦は非常の權利を有し家事に對しては全然主權者の位置に立ち各男子が稼ぎ來りし金品

は一切其妻に差出さざるべからず而して其妻は之をきりもりして夫々分配することゝなり居れり右は一國普通の習俗にしてまた一夫一婦なるもあり或は一夫多妻なるもあれど此等は其實例甚だ稀少なり而してまた僧侶は一般の尊敬する所にして一家五人の男子あれば二人まで三人あれば其一人を必ず僧侶となすの風なり

○常食は蕎麥粉

國人の常食は麥粉即ち我國の所謂蕎麥粉を水若くは酒に揑りて食ひ居れり素より箸を用ひざれは勿論手掴みなり尤も肉を食ふには小刀にて切りて食ふこと恰も洋人のなすと同一なり斯くの如くにして師が旅行には常に麥粉を食糧として携帶し居れば雪中の行路にて餓を感ずるときは先づ袋の中より麥焦しの粉を椀にて掬ひ出し之れに幾分の

「バタ」を加へて雪にて捏り而して他の椀に蕃挪と鹽とを混じたるものを盛りこれを捏り麥に浸し食ふを例となせるが其の旨さ加減は流石に極樂世界の百味の飲食も斯くやあらんと思はれるほどにて殊に寒國の麥なれば幾分か成分にも富み之を食ふて雪中四方の景色を眺めたるは言語に堪へたる愉快を感せしといふ

⊙猛犬と犛牛

雪中にて行旅につき途方に暮るゝときは師は先づ處を厭はず坐り込み凝と我知らず我を忘れて坐禪をなしたるが師はこれを斷事觀三昧と言ふ其の斷事觀三昧の示しによれば深山の方に行くは宜しからず「テント」の在る方を指して行くの安全なるに若かずと の決定によりて「テント」の方に向へば其處には幾多の猛犬ありて矢庭に師に嚙み蒐ら

んとす其の猛犬は肉と人糞とを食とする極めて長毛の形洋犬に似たる大犬にて稍も すれば危害を加へんとするものなるも師は豫て該猛犬の毆打することなしに杖を以て鼻先の處をあしらへば決して害を加ふるものにあらざるを開き居たれば毎に其手段を施して危難を免れたるが或はまた往々あしらふことを怠りて哀れ雪中に嚙み倒さるゝの不幸に遭會したることもありきと偖てまた「テント」の中には住民の財產の一として犛牛を飼育し居れり其の「ヤク」と稱する獸は大なるは我國の牡牛の一倍半もあるべく小なるもなほ牡牛の大さあり毛深く尾は恰も獅子の尾の如く大にして形總の如く垂れ勿論一種の牛に相違なきも其眼附の恐ろしきは誠に非常にて一度彼の凝視に遇へば今にも其鋭き角に掛けらるゝかを思ふ然かも性質は意外に温柔にて人民に利益を與ふることと毫も我國の牛馬に異ならず殊に他獸の歩行し得ざる險道を容易く辿り得るの特能

を有するに至つては西藏國民が如何に此獸のために利便する多きかを想像せしむ

○有難屋の老婆

西藏の家屋は古代の印度式にして多くは石造又は土造草造等にて其他は犛牛の毛を用ひたる毛織の「テント」を張りたるの家なり殊に僻地は多く其毛織の「テント」を用ゆるが故に師が先づ訪ふたる家は勿論これと同種のテントにして師は出迎へたる主人の老婆に對ひ余はヲッサの方面より來り是より「グロンリンポチエー」へ參詣する者なる旨を告げ且つ此寒氣に露宿すること難ければ希くは一夜の宿を貸し賜へと言へば老婆は意外にも快よく承諾しなは此地方は貴僧等の來るべき所にあらず如何して斯かる僻地に來られしと訝かりながら茶を出したるが茶といふも名ばかり我國のものとは大違

にて番茶を固めたる如きものを碎きそれを半日はども煮出し黑くどろ〳〵の汁になるを見すまし滓を取去り其中に鹽と犛牛の乳より製したる「バタ」とを加へたるものにて慣れざる者の到底飲み得らるべきものにあらざるも師は克く之を飲み終り尋で麥焦しの粉を郷應せられたるを師は非時食戒を保ち居るゆへに午後には用ひざるを語り辭退したれば老婆は非常に感賞しさて「グロンリンポチエー」に赴くには此處より徒歩一日の道程あり彼の人はチヤンタン全部の大喇嘛にて貴僧幸に彼地に赴かば得るところの利益多かるべし今にも愚息歸り來らば明日は必ず隨行せしむべし而して彼地に赴くには一の河流あり水非常に冷かなれば犛牛を用意せしむべきに依り乘りて渡るべしなど言ひ歡待至らざるところなく驚て師は其家に眠に就かんとするや老婆の子と呼ぶもの歸來りたれば其者の言ふがまゝ翌日訪はんと欲する喇嘛の神通力あること等を聽取

り漸く體を横へたるも前途の事など種々思ひ煩ひ終夜一睡をも取らずして夜を明かし翌朝息子を附せられ山また山を越へ河を渡りて「グロンリンポチエー」の弟子の住むといふ嚴窟に着し喇嘛に面會のことを請ひしも其日は規定の時間を過ぎ居ればとて謝絶せられ已むなく窟の中に宿り込むことゝなりぬ

○衆生濟度の方便を問ふ

大喇嘛と尊敬されて居るは七十位の老僧にして容貌魁偉筋骨逞しく雪の如き白髮を戴き人を射るの眼光は驚くばかりにて極めて凄味を帶ぶるの人物なるも人に對し慈悲善根を施し深く人を愛する高德の僧なるを察するに及んでは流石に老婆等が神通力を有する人として多量の尊崇を支拂ひ居るの無理ならざるを覺りてか師は老僧の前に禮拜

して己が佛法修業のために處々の名蹟を探り苦業をなしつゝあるを語り貴僧の高德を慕ひ示敎を請はん爲め態々來りたる旨を告ぐれば老僧が衆生濟度の方法は汝の知るところ卽ち一切の佛敎は悉く汝に存在するものなれば余に問ふの必要なかるべしと言ふを師は押し返して善財童子の例を引き大智識を天下に訪ふを答へしかば道の老僧も今は默し兼ね衆生濟度の唯一の方便が大解脫經に據るものなることを語りなは請に依つて經文の一部を示したるが老僧は其經の眞面目は三乘卽一乘なることを說明したる經文なりといふも師の讀むところ法華經に似たる經文にて或は法華經の一部を拔取りて斯くは名けたるにあらざるかを疑はしめしと

○猛獸を避くるの道は强盜の便

師は「ゲロンリンポチエー」を辭してそれより「カンリンポチエー」に赴かんとす素より住人尠き山間なれば案内者を得るに難く徐者もなければ自ら十貫目許の重荷を脊負ひて窟にて敎へられたる道筋を山麓に下れば果して幅一町半許の河流あり氷より冷かなる水中を辛うじて渡り越し其日は四時頃より高原に宿をなすことゝなりしが先づ拾ひ集めざるべからざるは犂牛と野馬の糞なりそれは燃料に用ゆるものにて（西藏にては總ての獸糞を焚料となす）これを整へ火を點し茶を暖めて喫したる後さて通夜火を焚くは猛獸の襲ひ來るを拒ぐの手段なるも爾かするときは山上より强盜の火を認め狙ひ來るの憂あり猛獸の迫害固より恐るべきも凡そ獸猛は靜に寢臥し居る者に對し多く

の場合に於て害を加へず寧ろ强盜の迫害を免るゝに若かざるを思ひ火上に砂を覆ひ翌朝に火氣を保つの道を講じ寢に就かんとしたるも空寒くして寢ねること能はざれば苦しみながら坐禪して一夜を明しぬ斯くて師は翌朝に及び前夜の火を搔き探し茶を暖め形ばかりの食事を濟し前日の行路を繼續せしが既に二三里許も過ぎしと思ふ頃途の前面に當りて河を渡り進み來る巡禮の喇嘛を認めたり漸々近きて樣子を聞くにカムより態々彼の「ゲロンリンポチエー」を訪ふものなりと言ふ是よりの「カンリンポチエー」に出るには何れの道を取るやと問へば河を渡り道程二日許にて「テント」あり其處にて宿を求め給へと答ふ師は喜んで携ふ所の干桃多分を與へ而して後荷物を河の對岸に渡し給はらずやと託せば喇嘛は直に承諾し脊に摺ひて川に入り何の苦も見せず運び去りしは强盜を商賣となすといふカムの國人はゞありて極めて强健の擧作なりきと

○西藏には珍らしき家庭

それより師はなほも敎へられたる道を辿れば日の將に暮れなんとするころ果して「テント」の在る所に達したり其夜は勸めらるゝまゝ「アルチユー」と呼ばるゝ新敎派の喇嘛の家に宿泊し翌日及び翌々日も療養のため其處に滯留することゝなりたるが既に二日間も休養して身體も漸く快氣を感じたれば其翌日「アルチユー」喇嘛より貸し與へられたる馬に跨り荷物は「ヲガーク」商人の驢に載せ該商人の一行と與にカンリンポチエ——へ向け出發し往くこと五里許にして「キヤンチエー」河に達せり河幅廣さは三町餘又狹さは半町許にて其河に達するや商人等の周旋に依り先きに「アルチユー」喇嘛より惠與せられたる米を炊ぎ他の人々と共に久々米飯を賞味したりと偖て河を渡るに馬背

を藉れば身に苦痛を覺へざるも河底砂深くして馬脚を沒するの憂あるを以て乘馬を止め勿論重荷をも馬上より卸し茲に一行は赤裡体となりて皮膚を破る如き冷水を渡り一憩の後河に浴ふて西北に進むこと六里許にして游牧民の棲むナールエに到着するを得たり此地はキヤンチユーの北岸にて七八個の「テント」あり師はカルヤと呼ぶ老人の「テント」に投宿せるが家には主人たる五十位の男子と是に妻女三人ありて其年齢長は四十七八次は三十五六次二十四五而して最も若き女に一人の子を有す即ち自から擇んで三人の妻を迎へたるにて斯かる家族は師が行旅中見ざる所なりと

○世界名蹟マナサルワ湖

ナールエは西藏の高原地而かも荒涼たる游牧場にて游牧民の棲む外人家人影を認むる

こと稀にして曾て奇巖怪石の傲臥せる間を過ぎざる師は今や空洞天地我れ一人の感あり轉た寂寞の想に堪へざりき斯くて此無人の境を行くこと約一ヶ月にして或は河水汎濫の難を渉り或は凍餒の苦を凌ぎ遂に世界の名蹟として夢物語の如く傳説せられたる「マナサルワ」の靈湖に到着したりきそれより同湖とランカード湖の南西岸を進行すること數十里にしてギャー、コマなる夏期の互市場に達し又東行してリターブリなる名蹟を尋ね後兩湖の北岸に兀立せる靈雪巖(雪山中の雪山)自然の秘密曼陀羅會なるチーセに禪觀を修めて又東に向ひ出發し西藏の首府ラッサへの本道を取りしが世界第一の高原にて道路の險悪甚しく猛獸剽賊處々に出沒し行旅の困難一方ならず時は漸く裏風凜烈にて一身以外氷雪を埋めたり

○西藏第一の大河

漸々進んで「タム、チョク、カンバブ」河畔に達す此河は西藏第一の大河にして「ブラマ、プットラ」河の上流なり河幅は最廣の場所にて十五六町もあるべく過半磧を以て滿たされ水淺く五六寸許なるも然かも河庭は砂深く股を沒するもなほ足らざる有樣にて水を渡るには極めて困難を感せり而して西北を望めば雪達磨の如き雪峰重疊して其偉觀譬ふるにものなく依つて一首あり毘盧遮那の法の御旗の流かと思はれにけるブラフスの河是より西北山間を上れば見渡す限り一帶の高原にして幾多池水の散在するを認む師が此處に到りしは後午四時頃なりしかば例の如く馬糞を集め焚火して一夜を明せり斯くて其翌日も同じく西北に向つて進行せしが向ふ所は雪蜂にてこれを越ゆる

ことの頗る困難なるを思ひ遽か方向を變じて東行したり幸に雪なきも命と頼む水無きに苦み其日七時比ゼで歩行したるも遂に水に行き當らざれば疲勞の餘り渇しながら其處に寢を取ることゝなりぬ

○活きた餓鬼となる

翌日早起出發の準備を整ふ此時は既に大陽冲天にかゝり意味なり氣に輝くを見る遙に向ふの砂原を眺むれば如何にも清水のある如く覺へたれば其れを樂に三里許の行程を何の苦痛なく歩みしが唯だ見る清潔なる小石の太陽の光に閃く而已にて前日午後より一滴の水を得ざる師は茲に全然活きたる餓鬼の如くなりて今は用意の寶丹を服用するも結局渇を増すの補となり何の効をも爲さざるは哀れなり斯くて十一時頃となり

一段低き個所に水溜を見出したれば師は即ち就て椀以て汲まんとするに其色赤く無數の微細なる昆蟲水中に發生し居りて殊に師は活物の游泳し居る水を飲むことは佛戒の禁ずる所なるを顧ひ容易く手を下すに至らざりしが渇甚だしく到底忍ぶ能はざるに依り釋迦牟尼如來の立戒に基き布片にて濾過し氣味悪く思ひながらも一椀を傾けたるが其時の旨さ加減は極樂世界の甘露も斯くありなんと思はれしぞ

○首府の拉薩に入る

斯くて師は高原を踰へ行きしに例の强盗に出會ふて着用の衣服を剝ぎ取られ携帶の食糧を奪はれ飢寒のために殆んど死に瀕せり此邊は極目茫々更に人烟を認めず食を乞ふべきところなく雪は膝が上に降り積りて寒氣肌を劈くばかりなり殊に雪光燦々とし

て眼に反射し爲に視神經を痛め濛々漠々恰も盲人の如く寸歩も進む能はざる有樣なるも屈せず撓まず雪中に匍匐して進行を繼續し此にまた絶望の域に達せしが游牧民に逢ふて其危難を免れ是も佛祖の擁護に依ること〻隨喜の涙を流し更に行旅を續げしが西藏名物の猛犬は遠慮なく吠へ付きて牙を鳴し爪を張り彼の獰惡なる虎豹の如く前脛を嚙み破らること幾回又は積雪のため徑路を埋められて沼澤に陷り或は絶食數日に亘りて疲衰地に伏する等千態萬狀の艱難を排して漸く西衛國第二の都府シガッエに到着し「タシンプー」といへる大寺に入りしが國禁として外人を容れざること〻て最初は寺僧も疑念を抱き種々に推問せしが支那の喇嘛僧として尠しも疑はるべき餘地なきまで巧みに言ひ拔け經典研究のため十五六日間滯在し同寺僧侶の信用を博するに及んで其添書を乞ひ受け出發し浴道の寺院に賴りて雨露を凌ぐと共に問法修行の功を積み拉

薩に入りしは實に明治卅四年三月廿一日なりき

○大藏大臣の庇護を受く

師が鄉里を出發して目的地たるラッサ府に到着するまでには三年九ヶ月の光陰を費せり然れども出發當時一の西藏語をも知らず其國に入りて尠しも疑はれぬまでに彼國の語を修めたるは能く堅固の信念ありて精力人に過絶するにあらざれば能はざる所なれん偖て師は到着の後「セラ」大寺に寄寓し學部ゼー舍號ビーックパに屬し專ら佛典の講究に心を委ね少くとも兩三年は滯留する心組なりしかば一擧一動に注意して國民の歡心を買ふことに努め殊に大藏大臣の顯職にある者の庇護を受け安穩に日を送りしが或

る時國王不豫の事あり師は大藏大臣の手を經て我國より携へ行きし藥の殘りを奉りしに王の病は頓に平癒せり爲めに非常の信任と尊敬とを受くるを得て殆んど一年餘の光陰を送れりと

○西藏鎖國の由來

今日にてこそ世界の秘密國として四境の封鎖嚴重なれども七八十年以前にでは外人の交通自在にして障碍となれるは唯だ地理の險阻のみ隨つて西藏人は博愛慈悲の佛敎を奉ずるより外人の國内に來りて落魂せる者あれば衣食を給して手厚き介抱を加へ少しも猜疑の念を狹まざりしが英國政府が西藏の藩屏たるシッキム王國を征服して印度の領地に併せたるより俄に疑惧の念を起し鎖國の嚴命を傳ふに至れり尤も國境を劃れ

る自然の天險は飛鳥も容易く過ぐる能はず文明の曙光未だ暗黑界を照さゞるがため外人に對し狐疑の念を去る能はざるは又已むを得ざる勢なり而かも其法律の嚴重にして殘酷なるは外人を導きて國内に入れ若しくは之を庇護する者に對し門地官職の如何を論せず三族を滅せずば止まざるといふに至ては酷も又甚だしといふべし

○西藏法王の宮殿と宗敎

法王トブテンギブショの在せる宮殿はラッサックの高丘上に聳へ印度古代風の美玉寶石を疊み燦然たる光輝を放ち内外の彩色模樣及び構造とも一種不可思議なる配合をなし居れり而して宗敎は新敎を奉ずるも庶民には信仰の自由を許せり首府ラッサを始め第二の都府シカヂ及び各地とも壯嚴雄大なる寺院を建築し何れも金銀珠玉を鏤め光輝

燦爛人目を眩せしめんばかりの結構なり而して又新教の僧侶は概ね赤布の法服を舊教は黄色の衣を着し被巾の如きも各等差ありて國内人民子弟二人若くは三人位を僧侶に養成して以て佛法の維持者たらしむ又僧侶養成の官立學堂を設けて盛んに佛法を説き却て貴族大商人等は學業を修めざるの風あれど昔時より佛法の旺盛を期し幾千年の今日に至るまでなは衰へざるは世界中西藏を以て第一となすべし

○西藏の文學と幼稚なる印刷術

文學は如何といふに自國文學を熱心に研究するに比し他國の文學を輸入せざるのみならず其本國と仰ぐ支那の文字さへ解するに能はず獨り現法王の支那語文に通じ居るには頗る奇異の感を起せり目下西藏を流行せる文字の形体は古代印度のランチャーに倣ふて一種特別の字体を編成し居れるものにして世人の想像する始き蒙古文字にはあらず支那文字にもあらず全く印度流傳の文字なれば其文學の淵源も略ぼ窺知すべきなりと而して又印刷術は師が入藏中大に注意を加へ佛法に關する經典を見たれども版刊發達し居らざるため容易く完全なる經文を得ること能はず唯だ目今印刷し居れるは僧侶學校の教科書及び祈禱呪文等にして是とても版行師を雇ひ來り若くば版行所藏の寺院に行きて特別の注文をなすに非れば佛經の賣買をなすこと能はざるの困難ありと

○財政の運用及通貨

西藏國の財政は如何して運用し居るかと言ふに地祖は其の主なるものなるも外に金鑛採掘の受負人より收納せるものなり又世襲的財産を所有せる寺院に賦課するありて其

他の額は悉く民間ありて上納に待つものにて即ち金銀牧牛及び「バター」、鹽等にして又蒙古内地より信佛のために多額の金員を送致せるを計上す而して國内の通貨は我二十四錢に相當さる銀貨を以て二分或は三分若くは六分に分割して賣買をなす故に最低價の買物と雖ども四錢を以て支拂ふことゝなるなり又一年幾回と期日を定め國境貿易を開き物品の交換をなすの例あるが主として米及び煙草を輸入するなり尤も支那米は比較的高價なるを以て多くは印度米を購入すされど國民の常食として多量の需用あるにあらず唯だ一部貴族僧侶の間に供せらるゝのみ

○西藏は世界の寶庫

國中到る所金鑛脈に富み特に石炭の路傍に露出せるを見るに至つては如何に無欲の

僧侶輩と雖ども仙人にあらざる限りは此れを傍視する能はざるの感あり而かも同政府にては需用の起るに從ひ或る金坑に制限を附して民間に拂下をなすも多くは失敗に終れるが如し是れ皆採掘の方法備はらざるに基因す若し之をして文明的の機械と方法とに依り文明國人をして採掘せしめば大成効を來すや必定なり宜なるかな歐州諸國が此秘密國に垂涎して屢次探檢者を發し其扉を叩かんとしたることあるを現に瑞典のヘテイン博士の如きは脚を其國境に入れたり而かも國情の危險なるに依りて其目的を達する能はざりしやに聞く

○日本人たること發覺(西藏の大疑獄)

師がセラ大寺に在ること一年三個月小心翼々として佛典を講究するに餘念なかりしも

不圖したることより日本人たること發覺し一身の危厄迫りたれば「ラッサ」府を出奔し印度に遁げ歸らんとせしも本道を行けは五個處の關門ありて容易に通過すべからず書は榛莽の間に身を匿して夜中無人の境を行き蹋大蹐地備に艱苦を嘗めて昨三十五年夏の頃より冬に至り漸く印度のダーヂリンに立歸れり然るに「ラッサ」府にては師が出奔後「セラ」大寺の學堂は閉鎖せられ大藏大臣以下數十人外國の諜者を導きたりとの嫌疑を被り悉く捕縛せられ日々の糾問嚴重にして同國稀有の大獄を惹き起すに至るを師はダーヂリンに在りて聞き痛心措く能はず我一身の爲めに無辜の人々を囹圄の裡に苦しめ若し死刑にても行はれる等のことあらば諸佛菩薩の冥罰も如何あらんと即ち之を救護する方法に就て焦心苦慮殆んど寢食を忘るゝに至りたりと

然るに好機會は來りぬそれはダリーの戴冠式にて我陸軍中將奥都督も之に列席する爲め出張せしかば師は都督に右の顚末を語りチベット國王の手を經て西藏國王への上書を都督より取次かれんことを哀願せり都督も其意を諒し師の上書をチベット國王の許へ齎らしたるが其上書の大意は

『東海一沙河口慧海は諸佛菩薩と諸天善神の擁護に依りて左しも要害堅固なる貴國の首府に入り慈悲深き人々の救助を得て千歲不磨の經典を研鎖すること歲餘業半ばにして此身の日本人たること發覺し國法に處せられて永劫奈落の苦患を受くべき處を遁れ出で身に羽翼ありとも通過すべからざる關門を脫して刻下恙なくダーヂリンに

○西藏國王に上書す

あり是れ人力の及ぶべきものにあらずして全く世尊佛陀の冥護を垂れ給ふ所なり夙に聞く貴國にありて愚衲と交りし者は國禁に問はれて不日慘刑に遇ふべくと抑も此等の人々は元より愚衲の日本人たるを知らざるものにして果して何の罪かある愚衲が貴國を欺瞞したる罪大なりと雖ども貴國の一切藏經を研鎖し佛法弘通の方便を得んが爲めにして世尊佛陀、諸天善神も其志を憐み給ひしに依り屢次虎鬚を編し虎尾を履みて遂に虎口を脱したるなり貴國の人々が不知不識の間に愚衲を庇護せしも亦佛陀の冥慮に叶へるならん然るに之を捕へて刑戮に委するは佛陀の咎も恐るべし況んや貴國々王は觀音の化身として大慈大悲の御心を有し給へるをや而も猶佛陀の冥慮に背きて愚衲の朋友を誅せらるゝや若し國家の法律として之を宥恕する能はずと云はゞ愚衲は一身を殺して諸人に代らん無辜の人々をして刑戮に就かしめ愚衲

一人此娑婆に栖息するは本意にあらず愚衲は決して食言の徒にあらず貴國の命令に任せ何時なりとも再び雪山の險を越えて貴國に赴き一命を刀鋸に委し五体を寸斷せらるゝも悔る所にあらず云々

○疑獄の落着

師が上書後の落着如何といふに西藏は近來支那の管轄を脱し北京政府差遣の官吏も有名無實にて殆んど獨立の有樣なるが唯だチベール國に對しては國際上其下風に立ち其意に背く勇氣無き由なればチベール國王より取次ぎし上書は多分採用せられ隨つて數十人の嫌疑者も生命を奪はるゝことなかるべしと是に於て師は稍々安堵して歸朝せるが其後果して無事に治まりしか否未だ確かなる消息に接せず或は西藏國王より數十人

の生命は助くるも師一人は捕拿して送致すべしとの意をチパール國王の許へ答報はせざるか共に不明なりと

○チパール國王の激賞

師は西藏に在ること一年三個月危く虎口を脱しチパール國に入り國王に謁見して入藏中の顚末を縷陳したるに王は師の探檢を激賞して措かず幾十年間幾多の外國人が難行苦行を積んで秘密の寶庫を探らんとせしも未だ容易に入境する能はざりしに貴僧が名譽ある資格を以て最も名譽あるセーラの佛教學堂に入りたるは貴僧の偉勳として他國人に誇るに足れりとて王の秘せる梵語四十一帙(價一千ルピー我六百五十圓)を師に與へたりと而して師は西藏にて購求したる佛典と共に其梵書を二駄の馬に荷はせカルカ

ッタに送り歸朝の際持ち歸りたるが一切藏經の手に入らざりしは極めて遺憾とする所なるも師は明三十七年十一月頃再び渡航しチパールに赴き國王の勢力により西藏に秘せる一切藏經を得る約束にて其結果大和の法隆寺に藏せる聖德太子時代に傳來せし藏經には多少の缺點あるを發見するやも計られずと

(編者曰)上記は慧海師が苦辛經歷談なるも以下項を追ひ西藏內地の事情を記載すべし

第二章

○西藏の離婚と姦通處分

西藏の結婚法は血族結婚を嚴禁し七等親までは之を許さず遍く世に知られたる兄弟數人にて一婦を娶るの奇習と反對の感あり尤も數夫一婦を娶るは生活の困難より生じた

る結果にして貴族豪富の家には稀なり子を生むときは兄弟中の或るものゝ子と定む其儀式は始め婚約成りて結納の事終り先づ吉日を選びて慶事の日を定むるは我國と同じく新郎は新婦の家に到りて婦の異存なきを確め肯諾の意を表すれば即ち新婦の頭に「バタ」を塗り次に新郎の承諾を得て同じく其頭に「バタ」を塗り新夫婦同居二週間を經て夫は始めて新婦を我家に伴れ歸るなり而して婚姻後離婚の訴訟起る時は判事は原被の相方を訊問し其曲夫にあれば結婚の日より離婚の日に至るまでの日數を計算し毎日麥五合を通計して其總額を妻に與へ若し其曲妻にあれば妻は着たまゝにて生家に追ひ返され最初持參の財物を失ふの規定なり姦通及び强姦に關する處刑は僧侶と俗人の區別ありて俗人は一般に其額に烙印を頂載する例なれば一生涯其痕跡を留め何人にても一見して前罪の有無を認知せらるべし而して僧侶なる時は永遠に僧籍を削らるゝな

り。

○葬式の奇習

家に死者あれば先づ之を喇嘛僧に報告す僧來れば死者の前頭部を撫でるの例なるが死者若し眼を開き居るときは肩下の瞼を擦して之を閉ぢしめ若し又口を開き居るときは顎に手をかけて之を塞がしむ其理由とする所は死者にして目瞑さゞるは殉死を希望するなり故に此を其儘になし置けば必ず不日にして近親中より再び死者を出すべし又死者の口を開き居るは吊ふ者の中の一人を呑まんとする證據なりといふ又死者の靈魂は喇嘛僧の唱ふる眞言一句の功德に因りて頭顱の中央に孔を穿ち其處より脱け出づ僧若し儀式に違ふことあれば靈魂は口若くば鼻より出で不祥之より大なるはなしと言へ

りされば死者の身体には喇嘛僧以外一人の之に觸るゝを許さゞるを普通となせども而かも死者に對し殘忍非道の行を爲し愚と言はんか狂と言はんか名狀すべからざるものあり即ち死体の硬くなるを防がんが爲めに絶息するや間もなく繩を以て之を縛り鐵槌を以て其頸骨を打碎き新衣を被らしめて家の一隅に敷きたる三小石の上に安坐せしめ三日間供養の式を執行し驅魂の上界に登るを祈り而して死体を墳墓地に運ぶときは前夜より喇嘛僧を請じ墓地に於て間斷なく密呪を唱へしめ惡魔退散の法を修す僧若し怠りて睡れば惡魔の退散せざるのみならず却て僧を襲撃し之れを死に致すと云へり故に僧は此儀式を執行するが爲めに莫大なる布施を受く特に奇なるは左手に人の大腿骨にて造りたる喇叭を吹き右手に頭蓋骨の太鼓を携ふ斯くて死屍を墓に運ぶや之を大柱に縛り附け喇嘛僧は利刀を執り臍を中心として十字形に截開し會葬者遠く退けば山鷲

群をなして翱り來り臍の截開部より啄み始め須臾にして其肉を啖ひ盡し餘すところは骸骨のみ吊者之を見て其側に集り頭骨、胴骨、四肢の別なく悉く碎きて粉末となし血漿腦髓に混じて再び退けば群鷲又集りて之を啖ひ五尺の形骸寸毫の遺なきに至りて止む

○訴訟の裁斷

文書其他の證據によりて判決を下せども若し其曲直判決し難きに苦しむときは雙六の勝負によりて之を決定し或は我邦の武内宿禰が弟に誣ねられて是非を分つとき湯を探るの裁判ありし如く沸騰せる油の中に黑白の二石を沈め原被兩造をして之を握り取らしめ白石を得て其手の爛れざるは直者とし然らされば曲者とす又熱灼せる鐵棒を握

りて其正邪を判ずることあり刑の執行は罰金、笞杖、徒流の三種を通例となせども或は弓矢を以て射殺するあり石に縛して河中に沈むるあり甚だしきは殺人犯にて被害者の死体に加害者を縛り附け一晝夜を經たる後生きながら屍体と共に之を埋葬す慈悲を主とする佛教國にして此等殘忍酷薄なる制度法律が行はるゝとは如何にも不可思議なれども原人時代より支那特有の慘酷なる法律を襲用し佛教の感化以外政治上必要として今日に至れるならんさればこそ正法律と稱へ佛典中より要領を探擇して編成したるものあれども是は聖德太子の制定せる憲法に類するものなりといふ

○西藏人の氣質

國人の氣質は一般に執念深く一度他人より辱めらるれば忍耐して復讐の時機を待ち

何時かは其恨を報ず然れども中心甚だ怯懦にして或る意味より言へは順良とも見るべく法律の下には忽ち畏縮し古語に所謂地を畫して獄となせば入らざる人を議し木を刻して吏となせば對せざらんを期するの風あり是れ刑律の慘酷なるに由るなるべし財利に臨んでは貪慾飽くを知らざれども寡欲の人を尊敬し口を極めて之を賞讃す隨つて自らも其貪鄙を掩ひ廉潔を裝ふの風あり男女間の制裁も嚴峻に過ぐる結果却て反對の傾向を生じ裡面は情慾を恣まゝにす酒を嗜むも又甚だしく風俗の陋名くる所以を知らず佛法の五戒、飲酒、邪婬、妄語、偸盜等の如きは正法律の中にありて一般僧俗の必ず服膺すべき制度なれども徒に儀式にのみ拘泥して教理は全く度外視せるものゝ如し殊に厭ふべきは衣食住の不潔にして支那朝鮮などの類にあらず母胎を出でゝ墳墓に運ばるゝまで一回々沐浴を取らず終生の塵垢皮膚に緊着して之に塗抹するに「バタ」を以

とすと云へり

○西藏の大祭日

昔佛陀の時代には新月と滿月との日斷食をなし種々の罪業を懺悔し說法を聽聞するを習ひとせしがこの規定は嚴密に喇嘛敎に於いて遵奉せられつゝあるなり毎月一日と十五日には僧侶は無論のこと俗人も一切肉食を禁じ生物をば一も殺さずこの日にのみ西藏の大寺院を公衆に觀覽せしむ又毎月或る一つの佛を祭るの日ありて宗徒は悉く群集し俗人も之れに加はりて賑々しく興じ戲むるゝなりされどこの大祭日は支那又たは日本の如く一定し居らざれば明らかに其の表を作ること難きも今假りに其れを揭ぐれば

一月	一日～十五日	戒食節	
		佛陀受胎節、花祭	
二月	廿九日	惡魔退散の祭	
三月	十五日	カヲタヲ佛の祭及宗敎舞踏會	
四月	八日～十五日	佛陀に近んとての祭	
		佛陀の死を祭る	
		醫師の佛の祭	
五月	五日～十日	パトスサンハグ尊者の誕生節	
六月	四日	佛陀の誕生及說敎、繪祭	
七月	十日	パドマサンハグ尊者誕生節	

八月　八日　水祭
九月　廿二日　招魂祭
十月　廿五日　ツオンカーパ尊者祭、提灯祭
十一月　一日　新年（舊式の）
十二月　廿九日　亡年祭

西藏の暦日は他と異なりまた官暦と民暦との相違あるを以て正確に定むべからずと雖ども略ぼ假定せしところを示すのみ

○新年の式事

西藏の新年は以前は今の十一月にある冬至の頃にして田野は悉く雪に埋もれ耕作す

る能はざれば無聊一方ならざるに一方食堂には肉滿ち日もまた今より長くならんとするを好期として新玉の年を祝ひしなり蓋し斯かる時候に太陽の回轉はいと目出たしとて稍々文化せる民は世界何處として祝せざるはなかりき政府が暦を改めて新年を以て一月の初めとするや多數の人民は舊式の祭日を廢して新に其暦によりて祭日を定むるに至れりされば從來の二月より三月の初の頃が新年になりたり新年の夕には大宴會開かれ人民は杜松の枝もて家屋を飾り酒樽を積重ね團子餅の類を數多供へて飲みつ踊りつ歌ひつ舞ひ又種々の戯戯を演ず人民は小村落より市町に集ひ喇嘛僧は衆生の幸福多からんことを祈る其の間々に假面舞踏など滑稽の行列などをして來觀者を樂ましむ又互に酒酌み交はし各自の健康を祝ふ凡そ新年の休日は四週間又は五週間打續くの例なるが其の間は「ラッサ」府の政治は常の支配者の手を離れてヤバング寺院の僧侶の

手に置かれ僧侶の主長が一時政權を掌握す此れ平生「ラッサ」の四寺院のみが政治を左右しては他地方の寺に不滿を抱かしむるに因ると斯くてパンゲの主長たる喇嘛僧は此の月の三日に嚴かしく裝ふて「ラッサ」に進み市の主座に据る彼は衆人の尊敬を受け其歩むときは何處にも香火を煙して不淨を拂ひ又彼の「ラッサ」市に到着する際には最大の罪を犯せしものゝ外は總ての囚人を赦免す

市民の不潔罪

パンゲの首僧が「ラッサ」に滯在する間は人民の生命と財産は悉く彼が掌中にありて帝王も及ばざる權力を揮ふ而して彼は寺院の財政の爲めに人民が些細の過失にも嚴しき懲罰及び罰金を課して己れの懐を肥やすを常とす然れは富有の貴族にしてパンゲ喇嘛の不興を買ふ又は不興を買ふの恐れあるものはパンゲ喇嘛のラッサに在る間だけ都を棄てゝ田舍に潜匿するなりと而して下層の人民は平素甚

だ不潔にして而かも不潔を不快とせず平氣に澄し居るもパンゲの政治を執る間は不潔罪に陷れられるの恐れあるを以て遽かに掃いたり拭いたり大清潔法を行ひて罪を免れんと心掛く又パンゲ首僧は屬僧と共に公費を用ひて惜氣もなく贅澤をなし宴會蹺戲に耽る彼は多くの仕事あるにあらず僧侶を集へて宗教史哲學及行儀作法に關する講演をなすなどの事あるのみ此の祭日の間ラッサに群り來る僧侶は無慮三萬にして全市何處へ行くも喇嘛僧の赤衣は右往左往に入り亂れしラッサが赤色に染めらるゝの感あり尤も赤衣の僧は國家國民の幸福多かれと祈りて一日の半を送り他は蹺樂を事とするなり

大供養會

は此月の前半は日々ラッサの大寺院に行はれ東雲明けやらぬ頃より夜更けまで香火の煙は空にたなびくなり殊に三日、八日、十日、十三日、十五日は神聖な

る日と定められ就中十五日は非常に重せらるゝの風あり此日に懺悔念佛すれば他の日にこれをなすよりも効驗顯著なりと言ひ俗民は最も美麗なる衣服を着飾り珠玉を着け互に贈物を取交はし新年の大祭の絶頂と思惟す二日にはナーチヤンの公定巫祝が靜々とヲッサの都に來り其入都するや道路の人民は之を仰ぎ見ることを禁ぜられ官吏と雖ども觀ることを得ず若し尠したも之を觀たりとの嫌疑を被ふれば誰れ彼の容赦なく懲罰せらるゝの嚴法あり二十六日には競馬あり射擊あり二十七日には軍隊の檢閲式あり月の後半には魔神を祭り三十日に至りてターラー神の祭ありて新年の祝祭は此に目出度結末を告ぐといふ

○佛陀入滅の紀念祭

紀念祭は四月十五日にて夏の始まるを祝すること及び雨神の惠を祈ること等を合せて執行するなり其れは此月の初より人々皆他の時節よりも一層念佛唱名のことを盛んにし指先に力を籠めて珠數を爪繰りヲッサ又はタションプー等の大寺院中には念佛者が蟻の如く群がりて寺を取圍み蚊の如くブツ〳〵囁げり十日より十五日までは俗人も肉食を禁じ出來得る限り慈善事業に金錢を投じ又此時を以て先祖の冥福を祈るの節とす此祭の間僧侶の多くは天幕の中に屯し大繪畫を展覽せしむタションプーにては繪畫を「キク」と名くる大塔の上より垂れて拜觀せしむ中には百尺以上の大幅もありて壯大を極め古色蒼然たる佛陀及び聖徒の像など徐ろに昔者を偲ばしむ此日に限り女にも寺院の奥まで出入を許す拜觀者は交る〳〵頭を繪畫の裾に磨り附けて冥福を祈ると云ふ亦雨神龍王ナーガー佛も此日に於て心を和くる爲めに祀らる此の祭りに就て一の大行

列行はる此の行列は先づラッサの俗人の政治家を先登とし次に大政官たる喇嘛僧次に他の諸役人にして彼等はポタラの朝廷より進んでラッサの大寺院に到り佛を拜し又モラチ寺に到り次で曲折したる道を廻りるメンド橋を渡りナーガ寺に達す彼等は木造の小船五六艘に乘りて河を下り龍王を祭れる寺の建てる丘上に上り堂内の蛇体に金銀を棒げ堅く戸を鎖して翌年まで開く能はざるやうにす斯くして雨神に向ひ季節々々に雨を降らすやう願ふなり

○水祭は感謝の宴

西藏にては水を以て神聖にして犯すべからざるものとなし居れるが秋の初となれば水神がこの水の魔力を解きて俗人の自在に任すと信ぜらるゝを以て西藏人は平常左ほど

沐浴を好まざれども此の季節には水の使用の自由を得たりなとして多くの水を用ふ而して水祭の日を定むるは八月の月に於て夜の明け方水平線の上に「リキ」又は「リシアガスタ」と名くる星の顯はるゝに因る西藏人は此の星を以て深く冥想に耽ける修者とし八月の初め曉を犯して南方の空に顯はれ其の威光にて水が清くなりて衆生の邪心を洗ふ力を有すと迷信す斯くて其日となれば曉天未だ明けやらぬに人民は泉及び湖水の邊に集ひ星の燦くを見詰め星が天の一方に顯はるゝを待ち早速淨水の一滴を啜る喇嘛僧は列を造りて湖水及び河川に赴き水神及び龍王に供物をなして淨水を飲む又殆んど二週間湖水或は泉の邊に「テント」を張りて起臥し頻りに淨水を飲み且つ其水に浴し飛んだり跳たりして遊ぶなり寺院の戒則さへ此祭の間は大目に見られて自由に行動するを許され多くの僧侶の中には此時を以て父母の家に歸るもあり

○提灯行列

提灯會はツオンカパ尊者の創めしものにて該尊者の祭日にこれを執行す太陽暦より言へば十二月の始め晝の最も短くならんとする頃にて光明の失せ行くを示し太陽の長く衆生を照すに至らんことを希ふの意をあらはすものと見ゆツオンカパ尊者は一千四百十七年佛の國に入りしと信ぜられ又尊者はゲーラン寺なる石の佛壇に出現し念佛を唱へ居たる群集に向つて行末此寺の盛大となるべきを豫言して消え去りしと傳へらる故に今其祭日には豫め佛壇をしつらへ百千の燭を點じ種々の供物をなし前に尊者の肖像を捧げ松明提灯を數限りなく携へて市中を練り歩き燈火の赫燿と燃ゆるを見て爾後の幸福多しと稱せらる

○喇嘛僧の生活

農工商の業を執る　喇嘛僧は煩雜なる教儀禮法の桎梏にからまれて身動きもなり難きが如きも然かも全く冥想にのみ耽りて冷灰枯木となるにはあらで多くは俗人と同じく面白く日を送るなり十分の勤行は大抵の僧侶の堪へ難きものと見え誦經の場合にも居睡をなし欠伸をなし又は世間談などをして怠屈を慰む日々の生活は寺院に住するものと寺院に屬せざる村巡りの者と及び山間深く隱遁せるものと各其狀態を異にす彼等の中には傍ら商業を營み手工を爲し又は田畠に耕作して食を得るもの尠からず隨つて托鉢して食を人に乞ふ者極めて尠し

足下に死する生者は佛　ナンガル寺に於ける僧侶の生活は一度眠りに就きて後目醒

むれば眞夜中にても必ず其寢床より起きて房中の祭壇に向ひ三たび跪きて禮拜し充分に聲を張上げて明晰に

『大慈大悲の佛樣願はくば二百五十三個條の戒を守るやうに助けて給はれ歌ひ踊り音樂を奏し又は世上の富貴を望み榮華を願ふの心を絕たせ給へ』

といふの意味を叫ぶ次で祈を捧げて言ふ

『南無十方の諸佛吾れは心に汚れなき僧侶にて只管に生物を憐まんと欲す吾が一生の願は其れなりと誓ふ』

と其れに次で

"Om! Khre cara ganaga hri hri Svaha!"

と叫ぶ此句は一の呪文にて僧侶が之を三度繰返して蹠に唾きさせば其日彼が踏む足下に死する生物は悉く佛となるといふ

朝の看經　は日出以前に行はる其は大なる鐘の音全院に響きて眠れる者共を呼び醒まし次で大なる木魚及び喇叭を鳴らす僧侶等は此の聲を聞き付け直に衣を著け寢房を出でゝ定まれる石上に赴き先づ佛を念じて諸々の罪業を消滅せんことを願ひ銅鉢に盛りて携へ來し水と「サクバ」と呼ぶ石鹼樣の土塊もて身を清め珠數爪繰りて己が殊に歸依する佛を祈る十五分間の後第二番目の鐘の鳴るや古參の僧侶は禮拜堂の戸の前に跪坐し新參の僧侶は稍々距りて跪き斯くの如くして一同禮拜堂に入りそれ〳〵定まれる席を占む席次は最も年少者が戸に近く坐し老年者は奥に坐す彼等の椅々列を作りて堂に入るとき之を管理する僧侶は手に杖を携へ戸の側に立ちて總員を檢閲す僧等は各々蓆の上に結跏趺坐し足を突き出さぬやう又上衣の蓆に觸れぬやう注意し沈默正視

して一語を發せず寸毫も体を動かすべからず若し少しにても此の禁を破らば管理僧は直に之に鞭撻を加ふ次で第二の喇叭を聞くや一同看經苦行をなし終りて後首坐の僧は口を開いて佛の恵を唱へ衆僧之に和し次で茶を喫す喫茶後の勤行は衆人の爲めの供養「ベーヲヴァ」其他の守り佛の禮拜並に佛に身を捧げし弟子の讃美をなす又世人の病氣平癒及び死者の霊魂の爲に祈願することあり此時はかく〳〵の人がかく〳〵の日に死し親族の誰某が此等の捧げ物をなしたりと衆僧の前に披露し次で西方淨土へ其魂魄を送る式をなし又病人に就ては別に平癒の儀式を營む愈々規定の勤行終れば茶及び汁を喫し鐘を鳴して會を閉ぢ僧は己が室に歸りて個人々々の禮拜をなし食を佛に供ふ

身体の態を七種に變ず　勢力もなく信徒も尠きユンヤ派の各寺院の僧侶の生活も起居動作の摸樣に就ては別に大寺院の僧侶と異る處なきも邪神怪物を一層深く崇拜する

の結果佛に佞し佛に淫する弊風愈々甚だしき傾あり且つ佛を禮拜したる後には米又は鮮肉を喰ふ習あり又田舍の僧侶は夜半目を醒したる時念佛を唱ふること大寺院の僧侶と同じく次で身を七種の態度に變じて自身の根本的大罪を免れんとするの奇習あり

七種の態度とは（一）佛陀の坐せし例に習ひ脚を屈めて坐し（二）兩手を膝の上に重ね（三）頭を輕く前に垂れ（四）眼を凝らして鼻の尖端を見詰め（五）肩を張りて鷲の翼の如くし（六）脊骨を伸ばして體を矢の如く眞直ぐにし（七）八葉の蓮の蕚の如くに舌を上顎に曲ぐるものにて此の七種の態度を演ずる間は己が一身は單獨にて荒野に在るが如き心とならざるべからずと言へり

喇嘛の隱遁者　僧侶の隱遁は印度佛教の常例の如く山間に退いて教法を修行することは其國に於て最も重要のことゝ認めらる斯るが故に昔の高僧は皆深山に入りて法を

修め一般僧侶に向つて之を奬勵せし由なれども末法の世となりては喇嘛僧漸く墮落して今は山間に隱遁するものなく偶々之を行ふものありとも昔の如く長日月の間を深山に送るを欲せず元來彼等の教理より言へば三年間山中にあるを規定とすれども今は胡麻化して三ヶ月位にて出で來り中には三日位山中にあれば充分と思へるものゝある程なり彼等が隱遁して山間に在る間は堪らず己の守り佛の名を唱へ又坐側の地を擲さつゝ十萬度額づく等の定めあり兎に角眞の教理は藻抜けの殼となりて徒に虚禮虚式のみを存せること前記の如し

僧侶の俗務　喇嘛僧は多くは內職として既記實業に從事するの他役所に雇はれて租稅徵收係となり又地主に雇はれて地代請求人となり中には裁縫師、靴工、製本業等を營み日本の僧ならば坊主頭に鉢卷といふ風にて一生懸命に稼げるもあり稍々智識ある僧侶は占星術を業として俗人の吉凶禍福を卜し又は繪畫肖像等を描きて寺の收入を

增すことに勉め居るものありと

僧侶の食物　喇嘛僧の常食は小麥、烏麥、蕎麥等なるが副食物は豆腐蒟蒻の類にはあらずして肉類を許され折々米、牛乳を用ふ尤も肉類と雖ども毎日用ふるにはあらずして其種類も羊、山羊及び牡牛に限り魚鳥の肉は嚴禁せらる但しチロング（即ち德高く能く戒律を守る僧侶）は全く肉食を禁じ居れるが酒類は如何なる僧侶にても之を飲用せり

僧侶の服裝　彼等の身に著くるものは角立てる帽巾、寬かなる衣服、帶、肌著、股引等にして靴を穿ち珠數を携ふ帽巾は印度の佛教にては別に用ふるもの無けれども西藏は氣候の寒きよりして之を用ふるに至りしものなるべく「フランチル」の如き厚く暖

さものを以て之を作り其色は赤、黄、黒にして形は種々なり大寺院の僧侶が儀式の際に著用する衣服は三組の衣より成り其材料は木綿の定めなれども中には禁を犯して絹布を用ふる俗僧もあり色は宗派の別に依り黄及赤の二種とす此の中にて黄色は大寺院の僧侶の用ふるものにして他の僧侶の之を用ふる時は嚴罰を受く靴は赤或は混色の毛布より成り題は獸革又は牡牛の毛にて造るまた尼の衣服も大抵男僧と同じく格段の相違あらず珠數は喇嘛僧の服裝中非常に重要視せらるゝものにして佛像佛壇にも概ね手に珠數を持たせあり是は單に僧侶のみならず俗人も又大抵珠數を携へ居れり

○拉薩の大寺院

喇嘛教の寺院の數多ある中にて特に莊嚴美麗を極むる大建築を首府拉薩の大寺院とな

す此の大寺院は正に天主教のペテロ寺院若くは我國眞宗の本山たる東西兩本願寺の如き地位を占め最も信徒の敬重する所にして殊に政教一致の西藏にありては其敬重の度も又ペテロ寺院若くは本願寺に超へたるものあり此の大寺院は「ヲッサ」府の中央にありて「ヂョワカン」(佛の家の意味)と呼ばる法王は即ち此の寺院に在るなり元來「ヲッサ」とは佛の地といふ意味にして此の大寺院あるが故に斯かる名稱を生じたるなりと云ふまでもなく此の大寺院は西藏にて最も古き寺院にして今より千二百年前時のスロン、タン、ガンポ王が其妻の持參せし珍奇なる佛像を安置せんが爲めに建築し其後漸次擴張し修繕を加へ今より二百年前に至りて更に改築せるものなりと

建築の大要

此大寺院は東方に面して建築せられ前面に空地を存して其處に旗柱を立てたり柱の高さ四十尺牡牛の毛、羊、山羊の角を柱上に附けあり本堂とも云ふべき

主要なる建物は三階より成り屋根は總べて金の板を以て葺きたり堂の入口には六個の大なる木柱ありて其柱は彫刻、繪畫、嵌金等を以て美しく飾られ堂の壁には喇嘛教始祖の一代記を畫き戸は外側を眞鍮にて飾り内側は浮上げ彫りにしたる銻にて飾りあり、進んで堂内に入れば廣き集合所ありて兩側に二體づゝ合せて四體の守護尊の大佛像を安置し其次には大なる柱の林立せる大禮拜堂ありて其内部を三に區劃し各廊下を設けあるが堂内非常に廣きを以て中央の廊下の上部より光線を引くやうに造りあり其れよりなは奥深く進めば禮拜堂、佛檀、佛像など相續き非常に廣大莊嚴を極む北と南との廊下の外側には一列に小堂の並びたるあり其數は兩方とも各十四づゝなるが此處には地位猶ほ低き僧侶が通常の念佛を唱ふべき席の設けあり此等禮拜所の左方より迂回して階段を上れば尊きが中にも一層尊き一室に達すべし只見る此室の左側には大な

る銀の水盤ありて溢るゝばかりに淨水を湛へ一滴啜らば邪念を去り二滴啜らば佛の御國に入るべく思はる此の室の周圍には佛の教理顯現を示すべき物品數多ありて輪廻の千態萬狀を說ける繪圖などもあり又廻廊もありて階下と同じく數多の柱を有し六個の禮拜堂は相並んで設けられ各其の中央に佛檀あり供養の折々には供物を捧げ裝飾を施し平常は之を取除くこともあり佛檀の彼方及び寺院の最下の室には四角の壁龕ありて釋迦牟尼の像を彫めり偖て尊きが上に尊きとは何ぞといふに階上左方の入口の前の甚だ高き所にある法王の玉座これなり玉座には目も覺むるばかりに見事なる裝飾を施し五個の柱もて之を蔽へり寺僧の席は其前に整列し位階に應じて班列を定めあり又玉座に對し壁龕の入口より左の方に戒法を規定したる高僧の座席あり而して壁龕の西方に又高き佛檀あり其頂上には諸佛及び高僧の像あり皆金銀を惜氣なく鏤めて造られ其

下に燈明を點じ香を燻らし供物を列べたり又曾て此寺院の經營の爲に東奔西走せし僧侶の像も安置せられ見るものをして自から尊敬の念を起さしめ夢幻の現し世に佛の御名の爲に身を捧げて此等の高僧と共に佛の國に入りたるが如き感〻起さしむ寺内の最大にして又最も古き堂内には貴重なる寶物金銀珠玉の類を藏しありて支那暦三月の初めには公衆の拜觀を許すことゝなり居れり全寺障壁を以て圍繞せられ堅く俗人の入るを拒ぎ夜間は婦人の寺領に足を踏み込むを禁じありといふ

○西藏の神秘劇

喇嘛僧は奇妙なる扮裝をなして舞踏をなすを好み俗衆も又此等の舞踏を觀るを喜ぶ而して演劇舞踏は他の多くの原始的人民の間に存する觀せ物と同じく全然宗教的性質を

帶ぶるなり僧侶は嚴めしき面を附け佛や鬼の風を裝ひて神秘劇を演ずる特權を有す西藏神秘劇と云ふ名は既に世界に知られ其演ずる所も西藏探險者に觀られしが遺憾にも其劇の脚色作の動機は曾て明瞭に知られず枝葉の事のみ頻りに附け加へられて益〻曖昧となりたる今僅に辿り得たる所によりて其劇の起原及び發達を記すべし元來西藏の劇は魔物退散の爲めに催はす鬼踊りの會より出で來りしものにて後にはセーロン島に行はるゝ如く佛裝して佛の歴史を演ずるに至りしなり神秘劇は今日尚ほ赤虎鬼の踊と呼ばれ不運の窮鬼を以て舊年を追ひ又人身御供に擬して戰神及び守護神の心を慰め次で來るべき年に幸多く戰爭に勝たんことを願ふ爲めなりと云はるこの人身御供は紀元前七百年頃佛教の入り來りし以前西藏にて規則正しく行はれしなり吾人は當時の支那歴史を繙きて記せるところを一覽し此の國の民が新年には人間又は猿猴を犧牲に

供せしを知るなり

祖先は食人々種　西藏人は實際人肉を喰ひし者にて或る風習の爲めに中世頃までも此の蠻風の行はれしこと確かなり彼等自身も食人々種を祖先とせしことを認め居りて今も尙は人を喰ふの習慣あるタンボー谷の蠻人と同族なりしを信ぜりこの食人主義の痕跡は神祕劇にも存じ西藏人の誓ひの語中にも我國古武士が弓矢八幡といふ意味にて『我が父の肉母の肉によりて云々』といふされど喇嘛教徒の苟しくも佛陀の敎を奉ずる以上は生物の命殊に人間の命を奪ふべからず依つて彼等は一工夫を凝らして祭の際生きたる人間の代りに麥粉にて人の形を造りそれを機關を供へしめ赤色の繪具にて血をあらはせしものを造る此の麥粉細工は紀元前八世紀の後半期にパドマサンバグワ尊者の創めしものと云はれ爾來製作術進歩して巧妙を極むるに至れり

赤虎形の鬼は赤き惡鬼となる　西藏にていふ貪欲なる人喰ひ鬼は遂に中世紀の印度佛敎の惡鬼と混和し從つて赤虎形の鬼は赤き惡鬼となり劇に於ても死王ヤマと其愛子とが最も觀客の心を惹くに至りぬ這は良く恐ろしき鬼を寫實的に現はし喇嘛僧の法力のみ此の鬼より人間を救ふことを思ひ起さしめたるを以てなり此の鬼たるや人間が死後必ず過ぐべき道途に極樂淨土へ赴く道筋に待伏せして色々に人間を苦しむと思はれ善業を積みたる佛弟子も偏へに之を思ふて夢も圓かならずといはる又此赤鬼劇は喇嘛敎の創立者パドマサンバワに關係あるを以て此の尊者の誕生日卽ち五月十日に於て最も派手に最も盛んにこの劇を演ぜらるといふ

神祕劇の筋書　此の劇は上に記したるが如く一年の終りに各派の喇嘛僧によりて演ぜらるゝ定めにて忘年祭の一部を形造り十二月の廿八日より三十日に渉る而して這は

ンッキムに於てよりもヲデータのヒミス寺に於て一層盛大に行はるゝを以て主として此の寺に就て說くべし偖て演劇の初日に近くや山間僻陬の地よりも百姓等續々とヲデ一ツに集りいよ〳〵其當日となれば早朝より人々皆祭日用の美服を纏ひ殊に女連は臙脂白粉にお飾して開場時間より早く寺院をさして押しかけ我れがちに見物し易き場所を爭ふ場中特に設けられたる棧敷は唯だ法王高位高官にて占められ決して他の侵入を許さず舞臺は寺院の客間を以て之に宛て幕間毎に役者たる僧侶は樂屋に充てたる小堂又は天幕の中に集り茶を喫し菓子を食ふて勞れを慰む人の腰骨を以て造れる喇叭を吹奏して演劇の幕明きを報じ次いで銅羅の音高く空を突裂き低聲の音樂これに伴ひそれに連れて支那絹の衣服を纏ひたる黑衣の喇嘛僧現はる彼等は『三』といふ意を現はす不思儀のしるしをなし徐ろに進み樂聲によりて嚴かなる舞踏をなす先づ左右の手を交る

〳〵廣げ立物は右に向ひ他の者は左に向ひ共に幾度も前に進んでは後へ退き遂には輪を作つて『三』の記號をなして退場す次いで食人の惡鬼等部下の蠻族を引き連れて入場し人類を苦めんとす彼等は天を搜り地に求め水に入り火に入りて絕へず人間を虐待せんとし餓ゑたる獅子の如く食を漁りて止むことなき態を演ずこれ正に惡の力の終始人を惱ます人は到底此れに逆ふ由なければ偏へに高德の喇嘛の慈悲によりて其を免るゝを待つのみ而して聖德終に惡鬼を壓服すれど其の全然服するまでには善惡の大爭鬪あるべく又一度屈服することあるも惡の力非常なれば再び三たび反逆を止めざるなり此等の惡鬼はダルガ、シワ及び死神(ヤマ)等重なるものにてこれに扮する俳優は胸及び衣服に人頭骨の模型を附け頭巾を後へ投げ半身半獸的忌はしき顏を現はす右手に鈴又は扇を持し左手に絹もて造れる赤及び青の旗を附せる小杖を持てり軈て長さ八九尺の

大喇嘛及び大皷笛等の鳴りて其れと共に群敵現はれ音樂はます〳〵調早く又高くなり異樣の假面を被れる群鬼續々押寄せて此處に大合戰始まる暫くして高き音樂止みて惡鬼等は聖者の近づくを知り右往左往に入り亂れて逃げ行く聖者は六人の從者を從へ神々しき而もて現はれ道路の民は老幼男女皆前に伏して其の高德を讃ゆ

神祕劇は國庫の費

此の劇にて西藏の敵喇嘛教の仇を現はすものにて人形を用ゆれども其を討伐してずた〳〵に切斷するに當り之を眞實氣にせんとて豫め準備を施す卽ち劇の始まる數日前最も巧妙の術を以て一少年の像を麥粉にて造り一見生けるが如くし心臟肝臟胃腸を示すべき諸機關を挿入し之に赤汁を注ぎ込むのみならず又時によりては動物の肉をそぎて附けることすらあるなり殊に神祕劇は國庫の資を以て總ての大寺院に行はる劇用の假面の大なるものは色紙と布片とを以て造られ希には銅にて製せ

らるゝことあり但しシッキム及びボタン等材木の多き所にては木片にて彫り之を造る而して其の紙製銅製木製の如何を問はず何れも異樣に畫かれ赤黃紫靑等種々の色の牡牛の尾を用ゐて其頭髮となす鬼王の衣服は最も價貴き絹布を用ゐ肩掛をも附し他の鬼共の衣服は木綿又は羊毛にて造る又彼等の衣服は激しく擲たれしとき破れざるやう堅固に造らる

獅子踊の劇

演劇中獅子踊なるものあり踊の筋は古傳說に比馬拉山中にありと云へる獅子の話を題目となしたるものにて其の大さは牡牛大にて頭と肩とは木片を以て造られ前後に一人宛人間の潛みて之を操ること日本に於て行ふ獅子舞の如し道化師が粗野異樣の風采をなして口上を述べ獅子は其れに連れて飛んで塲に上り机に上り又は逆立などして各種の所作を演ず此の他佛陀の前生を題目としたる神祕劇あり俗人の男女

の役者の演ずるものにて中には旅役者ありて四季殊に冬季西藏の各地を巡りて興行し或は喇嘛僧正の目前にて演ずることさへあり此の劇の前後及び中間に茶利じみたる所作をなして見物の喜びを買ふ又佛教劇中最も人に好まるゝはヴイスワンタラ王の話にして這は教の蘊奥に達せんとて己が全財産のみならず又其の愛兒愛妻を棄て難行せし筋なるが觀客は感あまりて泣くことあり今より千八百餘年前印度へ侵入し奪掠を恣まゝにせし野蠻なるインドン、アレ族すら此の王の苦行の繪畫は文明人より見ればあまりに慘忍にして惡感を催ふせど西藏にては之を彫刻にも應用し又上手なる役者はヴイスワンタラ王が己の腕の肉を削り取りて火に投じ一心に佛を念じて神色自若たるを示すことあるも西藏人は毫も其の殘酷を厭はずして同情の念を濺ぐ此の他慈悲王光明等の演劇は孰にも有名なるものにて觀客は老若を問はず皆演劇を喜ぶのみならず又是を以て勸善懲惡の具となし日常の行爲にもこれを摸範として善行を奬む

○西藏の人情

殺生戒を極端に守る　喇嘛教は單り寺院に於て偉大の權力を揮ふ而已ならず眞正の通俗宗教にして人民の日常生活の一般に渉りて痛切に支配す西藏人の希望も恐怖も凡て此の教の上にかゝりこの教の爲めに幾何か心を高むることなきにあらず先づ蠻勇一點張の未開人に文明の一端を示し又慈悲心を抱かしめ生物虐待主義酷薄の念を薄からしむ西藏人が日常服膺すべきものと思ひつゝある金言、詩歌、戯曲等も宗教に依りて授けられ友情も是によりて厚くせらる西藏人は云ふ『幾千萬里の野を超へ山を越へ共に此地に集まりし彼等西藏人は一河の流一樹の蔭の比にあらず深き因緣のあることな

れば互に睦じくすべきなり微小の魚鳥昆蟲とて又前世の緣を以て同じ土地に生れしものなれば濫りに殺伐すべからず』と盲聾啞等を以て前世に罪を犯せし報ひとなすなどは佛敎の常理なるが西藏にては殊に嚴しくこれを信じ殺生戒も非常に極端に守らる故に山羊牡牛の外は食ふべからずと定めらるゝにより裏國に必要なる肉食の缺乏を來たし衛生上甚だ宜しからざる傾向ありまた屠獸業を營むものは最下級の人間と思はれ大に侮蔑を受く

罪人の刑罰は極めて峻酷　なる愛は禽獸に及の感ある此國人に似合はしからぬことなり是れ一は支那の刑罰法の影響にして又一は再び罪を犯さゞらしむる爲めならん大抵の罪人の罰金を出せば許されるれど若し幸を拂はざれば殺されざるまでも慘酷極まる處分を受け四肢を切斷さるゝことなどあり今も拉薩のあたりにては兩眼を抉り拔かれ

又は兩手を折られたる乞丐の彷徨して食を求ひを見ること多し

他人を思ふの情は深し　他人を思ふの情は色々の優しき行ひの基となり旅人又は旅に出でんする人に向つて酒を贈り『幸多く旅行し給へ』と心を籠めて祈念す商人は物品を賣るに當り買ふ者に向ひ『壽長く家富み病に惱まぬやうに願ふ』と云ひ買手は又感謝の意を表す僧俗共に信仰堅固なるに關はらず異敎の迷妄なる思想をも信ずること深く呪詛をなし護身符を持す而して旅行ト居結婚等大抵理性によらず謬信に由ること多し巡禮は最も一般に行はれ機會さへあらば有名なる靈地を巡り又近傍の佛地佛跡を尋ね而して多く惡鬼に祈念し其身を惡道へ導かざるやうに賴み又此の世にて金に不自由せざるやう併せて美衣を得たしと祈る日常にても珠數を爪繰りつゝ極樂淨土へ行かしめ給へとの意味を唱ふ斯く勉めて祈念し苦行し僧侶の崇拜大なるにかゝはらず却て現

在西藏の人心は不安に陷りつゝあるなり此れ蓋し恐ろしき惡鬼の壓力に加ふるに專制的僧侶の壓力を以てするが故にして西藏人が此の苦痛を免かれ安き心を得るには全く喇嘛教を棄て又日夜己の四方を取り圍みつゝありと迷信せる惡鬼を念頭より去ることなり

○經典に香花を手向く

國民は佛陀の教を記せる經典をば他國の佛徒と同じく非常に尊重し其の極物質的に神聖視し高檀に奉置し香火を手向けてこれを察り苟も佛の言葉を含める書物は斷篇零節に至るまで此上なき寶物となす而して喇嘛教の經典は梵語より忠實に譯せしもの多く稀には支那語より重譯したるものあり此等は大抵八九世紀頃に於て成り又十一世紀

より十三世紀の頃に成りしもありその翻譯を出版せしは比較的近時のことに屬す而かも多くは今に至りて尙ほ寫記するに止まれり

○總ての書籍は宗教臭味

西藏にては書冊多く出れど殆んど總て宗教に關し國人は古經典に全智識の收藏せらるゝものと信じ其の他のものは毫も注意するの價値なしとせり故に印度の經典は翻譯以外自國に成りし書も概ね佛教の事に關す斯くて西藏人の物せる書籍は悉く宗教趣味を含み其の宗教書は分つて不確定のもの及び確定のものゝ二とす前者は其數最も多くして又最も風俗的なり此等の中重要なるは小說的に造りし佛の御告にして「タルヤ」と呼び喇嘛教の始祖パドマ尊若の作なりといふ此の他シッキムにて發見せられし有名の

書籍にナーイク（即ちシキ聖地物語）といふあり「カンチエンドーナ」といふ山神御利生記又は尊者の御利益記等各寺院それ〳〵多少の緣起樣書籍あり第二に屬する正確と認めらるゝものは「プトー」及び「パドマカルポ」の宗教年代記「ズヴアールローツア」及び「ターヲナーサ」の歷史アンドヲーマの物せる百科全書等にて凡て敬虔の意を寓せる獻身的の文句を以て始まり此書に據りて佛の功德の一層廣にらんことを望むとの意を現はしたる文句を以て終る

重要なる儀式錄　各派の重要なる儀式錄も多少正確なる性質を有し此等を小冊子に縮めたるもの多く衆人が日常携帶するに便利ならしむ個々の僧侶にしてそれ〳〵特別に祈念用の手帳を所持し佛陀を讃美する歌の小集をも所有せり而して宗教外の世間的の書籍重に年代記樣のものにも多少の佛教臭味あるを免れず「即ち有婦い珠數」と題せ

る格言集又酒宴の時などに歌ふ歌集皆之なりとす次に喇嘛教の圖書室は寺院中にありて浩瀚の書籍を書架の上に置き一枚づゝより成る書卷をば布片にて纏ふ而して讀者は膝の上に書籍を置き音讀し終れば必ず「尊とき教によりて福を得んことを望む」と言つて己が頭上に書を戴くなり寫本するものも作者又は譯者と同じく常に寫し終れば「此の書の生物に益を與へんことを望む」と記して筆を止むといふ

○刑の執行者踟躕す

既記したるセンチエン、ドルセー、チヤンス師は八歲にして出家し三十歲にして西藏第二の都會シガッチェ府リシレンブー寺と言へる大伽藍の住職となり學德並び秀で西藏第一の善知識と稱せられしものなるが外人庇護の嫌疑を以て水中の紋罪といふ無類の

酷刑に處せられたり其原因は慧海師の恩人たる西藏語學者サラットチャンダラーダース氏が英國政府の內命を奉じシッキム國の僧と共に修學を名として政治上秘密探偵の職務を帶び西藏に赴きて先づタシレンプー寺に寄寓し國內の情況を取調べ地圖を作りて英國政廳に復命せり然るに此の事露顯してタシレンプー寺の住職は外人の秘密探偵を幇助したる者なりとて糾彈せられ捕縛の難に遇ひ遂に水中絞罪の慘刑を宣告せられたるにて時は我明治二十年七月西藏の東部コン國に檻送せられコンポと言へる大河に於て刑の施行と定まりしが該住職は元來第一の碩學高德なる喇嘛なれば刑の執行者も未來の冥罰を怖れて手を下す能はず徒らに躊躇歎息するのみ邊近の老若男女も尊者の死を惜みて來り吊し聲を放つて慟突し天地も爲めに黯澹たる態なりしが尊者は繩を頸に纏はれたるまゝ河中に浮沈する數回の後吏人を顧みて我命既に盡きたり汝等我を

殺すに忍びずんば我自から死せんと水中に沈んで復た浮ばず尊者の齡時に四十六歲なりきと因に記す西藏の法律として喇嘛僧の死刑に刀劍の類を用ふるを許さず是れ尊者が水中の絞罪に處せられし所以なりと

○國內醫師皆無

西藏國は海を拔くこと一萬四千尺餘の山腹にあり空氣稀薄なるを以て衛生上甚だ宜からざるも支那內地の如く流行病あるなし天然痘時々流行するも元來其國には醫師皆無にて支那の所謂草根木皮の如き藥餌となるべき料も容易に得られざるが故に一旦病に罹るときは殆んど坐から死を待つの有樣なり然るに慧海師は漢法醫の心得ありしに依り同地の水腫病者を治したるは其數を知らざるほどにて每に驚思議の効を奏し遂

に國手の讃辭を得るに至りしが師が國王に藥を呈し偉大の信任を得たるも畢竟之が爲なりと

○西藏人の衣食

貴族は素祿にて官吏は總て少額の俸給に依りて衣食す而して一般國民は多く牧畜を業とし傍ら麥作をなして麥粉を製しこれを肉類と共に常食とするの風なるが飲料は不思議にも麥酒を製するの道を知りこれを飲用す而して又服裝は國民各自の奉ずる宗教に依りて異同あるも概して支那的寛胸なるものを用ふ色合は僧侶を除くの外赤色を許さず冬季はルーダン山に產する山繭織を用ひ其色一定せざるも夏季は一般白布を着用するもの多し

○財產は必す親近者に讓る

西藏內地にて市は言ふを待たずヲッサを遠ざかる僻村の土地と雖ども相當の財產を所有し富裕なる生活を營むもの尠からず假令へば尊長にして犁牛と羊とを併せ五六千匹を飼育し五六十間四方の大「テント」に住居すれば先づ富豪と見做すも差支なく此等の類は決して尠からざるの例なるが斯かる富家の財產にして一旦家長死亡する等の場合は其遺產は如何なる方法に依り他に讓渡せらるゝものなるかといふに其國の風習として兄弟若くは兄弟の子に相續せしむるを常となし卽ち最も親近の者之を受くるの定にて他人を養ふことを許さず其は次漸の習慣法に基くものなれば誰人と雖ども異議を狹むこと能はざるなり

○古代の宗教

西藏にはボン教と呼ぶ一種の宗教あり其國古代の宗教として一般の尊信を受けたるものなるも一旦佛教入國の後は漸々衰頽を來たし今は微々として一部國人の信仰に存するに過ぎず而して該宗教は曾て其衰ふるに當り所屬僧侶の力に依りて從來の組織を革め全然型を佛教に取り新ボン教と改稱せられ大に回復に盡力したるの蹟ありしも遂に其効を奏せざりき事實此の如くなれば教理に於て犧牲を供すとか若くは飲酒妻帶を除くの外毫も佛教と異るところなく隨つて全然信徒なき次第にはあらざるも而かも古代の宗教にて神々の住むてふ社樣のものは殆んど存せずして大抵は石山或は雪峰若くは池水沼湖等に寄縁して僅に回顧親炙せしむるの料たるに過ぎざらしむといふ

○商業の幼稚

西藏の商業は極めて幼稚にして未だ大に野蠻時代の舊套を蟬脫するに至らず故に多くは物々交換にして金錢を以て賣買するは先づ皆無と云ふも差支なき有樣なり偶々之ありとするも其は多く印度の貨幣にして本國の通貨は分割の煩ありて實際に適せざるの嫌あり交易の物品は重に內地より羊、羊毛、鹽、「バタ」、犁牛の尾を供給しヲパール國及び雪山地方より持ち來る砂糖、羅紗、布、小間物等を需用す而して計算の方法は本邦の如く筆算若くは珠算に據らず珠數の球にて勘定するものにて特に頗雜なる取引に向つて黑白二樣の石を用ひなは竹片と貝殼とを併用し大抵本邦人にて十分時位を幾すの計算も胸算の不確なるが爲めには一層遲鈍にて二三時間を浪費するの己むを得

ざるは其蠻風の弊の甚しき驚くに堪たるものありと

○西藏人の不潔と健脚

西藏にては首府ラッサ附近を除くの外道路と稱すべきほどの通路なく小石の比較的に尠くして人馬の踏破したる足跡多き場所を以て假りに本道路と名くるに過ぎざれば文明的車馬を通ずるの道路は無論之なきなり故に曾てチベット國王より態々新調の馬車を西藏王に贈られたることあるも之を用ふるに路なくして空しく宮殿に飾り附けありと事情此の如くなるを以て國人は次漸の必要なる習慣に依り概して健脚にて如何なる險坂艱路を事ともせず容易に跋渉横行し得るの風あり行商牧畜を業とするものゝ日に二十里内外の長途を來往し尠しも疲勞の色を現はさず未だ靴を脱せざるの間に於て虚

氣談笑恰も旅行の其事なき有樣なるは驚くの外なしと言へり而してまた國人は終日生活に追はれ他を顧るの暇少きと常慣の然らしむるところとに依り尠しも清潔を欲するの念を有せず家の内外の不潔穢汚なること是又驚くばかりにて殊に各人沐浴を好まざるの故に嗅氣鼻を衝くの有樣は到底他國に其類を見出さゞるべしと

○カム人の懺悔

西藏にて强盜の本場所と言へばカムにして住民多くは獰惡にして旅人を掠むるを殆んど本業となすものゝ如し而かも釋迦如來を尊信すること恰も本邦に於て强窃盜其他あらゆる罪惡を犯すものゝ一層神佛を崇敬し且つは樣々の御幣昇きの說を信ずるが如くにして彼等は身に罪惡を犯しながらもなほ自已の幸福を祈ることは各國皆然らざるは

なさなり而して懺悔なるものゝ主意が今まで成したる罪業の悪しきを悟りこれを悔ひて將來罪悪を再びせざるに依り以前の罪業を赦し給へと云ふにあるを彼等カム人は

「あゝ、釋迦牟尼佛よ三世十方の諸佛諸菩薩よ私が是まで幾人の人を殺し人の物を奪ひ人の妻を盗み人と爭ひ人を打擲した種々の罪悪は此處にて斯くの通り懺悔した上は其罪は一切消滅せしものと信じますなは今日より以後私が人を殺し人の物を奪ひ人の妻を盗み人を擲つところの罪も今此處にて確に懺悔して置きまする」

といふを普通の事となすなり奇は即ち奇なる懺悔の仕方なりと雖ども我邦人の罪悪を犯すものゝなは罪を蔽ひ若くは免れんが爲めに神佛の加護を受げんとするものあるに較ぶれば彼等未開の國にあつて獰悪と見做され居る人種としては寧ろ當然の感を惹き起さゞるにもあらず

○比較的機敏かる商人

西藏國にては通貨を始めとして其他商業に必要なる機關を具備せず殊に交通機關を有せざるが故に商業として見るべきものなきは前項記載の如くなるも就中機敏なるものを擇へば先づ僧侶の營む商業にして彼等は從者と從僕とを伍して一の馬隊を作り地方の產物たる干葡萄、干桃、毛織物、絹織物等を市に持ち行き茶若くは諸の繪畫類と交換するものにて文字に通じ比較的事理を解すれば他俗人の商業に比すれば多少敏活の行動を爲すものゝ如し然れば其國の商權は副業となし居る僧侶に歸し僧侶は各般に渉りて勢力を收容しつゝあるなり斯くて喇嘛は一般國人の上流に位し庶民の尊敬を受けつゝあるも半教半俗の悲しさには知らず識らずの間俗醜に感染し本職の何物たるを打

忘れ佛戒を破り見苦しき家庭に其身を持崩し居るもの往々あるは誠に是非なき次第といふべし

○巡禮の多きは生活の苦

巡禮と言へば佛閣を巡拜するものゝ如く間ゆれど西藏の巡禮は實際左にあらずして全く生活の苦境より起るものにて其國の諺に

「人を殺さゝれば食を得ず、寺を廻らざれば罪消ぜず、人を殺しつゝ寺を廻りつゝ、進め〳〵」

といふことあれば是にても第一の目的は食を乞ふにあるを知るべく食を得るが爲めに暴戻なる根性を習養し强窃盗をなすに至り第二の目的は其が罪業の消滅を期して諸の

佛跡靈地を巡拜するものなることを察すべし即ち食を得る爲の强窃盗は主にて巡禮は眞の附たりの仕事たる有樣なり既に彼等の心に於て許す懺悔を以て時々の罪業を消滅し得るものなりとの大誤信は却て彼等の食を得るの手段を暴戻ならしめたるの跡明にして妄信の結果は斯かる害毒の極に至で遂せしめたりき

○雪峰の靈跡

靈跡とは所謂その中央にある釋迦牟尼佛の体をなせる雪峰とこれを圍繞せる諸天諸菩薩の雪峰と五百羅漢の雪峰を總稱したるものにて其の靈跡を巡るに三條の廻道あり外道にあるを「チーコル」と言ひ其次を「パルコル」と云ひ又其内部にあるを「ナメギコル」と言ふ而して内廻道は神佛にあらざれば廻る能はざるものと盲ひ傳へ普通參拜人は概

ね外廻道にて巡るを常とす尤も外廻道を廿一回巡り終るものには中間の廻道を許すの定めなるも道程の近きだけ道路非常に嶮峻にて巖石若くは積雪の爲め容易に通過すること能はずと言へり

阿彌陀如來の像　山の四方に各一個の寺院ありて其西方の寺に阿彌陀如來の像を安置す光澤ある白き寶石を以て作られ顔は西藏風にて極めて柔和なるも尊嚴自ら備はりて參拜者をして覺へず敬慕せしむるに足り西藏の美術として賞揚するの價値を有す而して像の後方には西藏々經の佛部を飾り普く參拜者をして燈を供へ禮拜せしむの裝置をなせり

黃金溪　巖壁巖乎として屹立し覆ふに玉の如き雪を以てす巖の彼方を望めば千尺以上の瀧數條種々の形をなして虛空を破るの雪峰より飛下し壯觀極まりなきの天景を備

ふと又「リー、ヲ、ブリー」と呼ぶ精舍の面前南方の中央にあるは即ち雪峰チーセにして其東にあるを雪峰文殊菩薩と稱へ其西にあるを雪峰觀世音菩薩と稱ふ

○靈湖と靈泉及靈阪

マナサルワ湖　は世界の最高地に在る湖水にして海面を拔くこと實に一萬五千五百尺(富士山より高きこと三千尺以上)經典に所謂阿耨達地とは即ち之をいふなり周回凡を八十里許もあるべく形は八葉蓮華の花の開きたるが如く周圍に巍然として聳へたる數多の靈峰を併せ豪壯にして清淨無垢なる景色は見るものをして除る靈妙の仙境たるを感想せしむ

ランチコン泉　又其近傍山峰にチコーミク、トンパア、ランチコンと呼ぶ靈泉あり

此は印度ガンヂス河の源泉にして重疊屹立せる白色大理石の巖下より湧出し西藏人及び印度人は之を靈水と稱す共に有數の靈地なりといふ

解脫母の皈　佛說に善財童子の住たりと傳ふノルサン峰に沿ふて登れば解脫母の坂の頂上に達す此處には天然の岩にて成る解脫母の像あり山峯高く雪峰チーセに匹適す又坂路を下ること三町餘にして大なる池あり是は昔者善財童子の手を洗しといふ靈地にして傳說する所に據れば當時盛夏の頃は結氷を見ざりしも或る時一巡禮ありて此處に來り俯して手を洗はんとはなしたるを過つて脊に負ひし小兒を池中に落とし死に至らしめしを山神の痛く不憫に思ひ後日斯かる事なきやう封じたるとかにて何時となく結氷を見るに至れるなりと

○耕作と牧畜

西藏國は崑崙山系と比馬拉山系との間に挾まる面積六十五萬一千餘方哩の廣原にして其土地の高きこと海面を拔くこと一萬尺以上なれば卽ち國民は恰も我國の富士山頂に住むと同一なり氣候寒氣强く辛鹹の湖水にしてなほ結氷を見るの有樣なれば空氣乾燥を極め國境の山麓を除くの外絕へて森林を認めず耕地尠く東南一帶の地以外足跡の至らざるの處多し農作物は瘠土加ふるに耕作の方法完からざるを以て蕎麥、麥等少額を產するの外絕へて記すべきものなし而して牧畜は西南印度に接するの原野最も盛んにして其他僻陬の地皆然らざるはなく國內六百萬の住民中生產に從事するもの商人を除き他は大部牧民ならざるなきの有樣なり然れば西藏に於ける產物は牧畜より得るもの

ゝ他殆んど皆無にて「乳」「バタ」等は生産餘ありと言へり

○國民の財産

前項記する如くなるを以て國民の財産は食糧を第一とし山羊、羊、犛牛等を數多飼育するを富裕の家となすは當然のことにして殊に佛教國の故に宗教に關する佛像繪畫類を無上の珍寶となすの傾きあり絹織物は毛織物より一層國民の嗜好に適し居常寒氣を凌ぐの外祭日其他の祝日には必ず絹服を其地上流社會の晴れ衣に用ふるを例とす而して女子の髪飾は特に金銀寶石等より成る高價の品を使用し是又自家財産を代表するの具たる摸樣あり概して其國の財産は此れを金錢にて貯蓄するにあらずして多くは物品として之を所有し富家に必ず要する石藏中に保藏するが如し

○雇主と被雇主の關係

西藏にては生活困難の爲めに他人に使役せらるゝを望むもの多く彼等は一旦雇人となれば曾て食腹に足らざれは奔勞馳驅し滿腹すれば鼓腹して逸樂を貪ぼるの慣性を離れ一生懸命に立働くを事とす彼等は寧ろ雇主に忠直なるを欲するにあらずして自己の放追を憂ひ又其自己の放追が將來他の雇主に使役せらるゝの妨げとならんを氣遣ふものにて雇主に取りて最も利益の習俗を養成し居れり而して雇主は其内心の如何に關はらず外面忠實に仕ふその風あるを以て安心して家務に從事せしめ殊に其待遇は日常雇被雇の間に嚴格なる懸隔を設けず殆んど自己の家族に對すると同一の取扱をなすは未開の其國にあつて賞すべき習慣といふべし扨て又給料は素と被雇人が各自

の困難より使役を望むものなれば敢て高給を要せず商業上多少の智識を有するものに對し一日一「タンカー」を給すれば充分にて或は單に衣食を給與せらるゝのみにて使役さるゝもありと

○文明的輸入品

國民未だ未開の境遇にあるを以て文明的輸入品なく僅にチベット國を經て洋燈、「マッチ」等を輸入するに過ぎず而して「マッチ」は我國の製出にかゝるもの多く其他稍々進歩的の小間物類にして印度地方より輸入せらるゝもの、中本邦製の品にあらずやと思量するものもありと要するに文明的輸入品の極めて少額なるは彼國鎖國主義の爲めに國人の嫌厭するにあらずして風俗の大に他國と趣を異にし隨つて國人の使用に適

せざること主なる理由にて今一層開發に趨くにあらざれば到底他と通商を盛ならしむるの餘地なしと雖ども支那的絹、木綿の等織物類交易は漸次年額を增すの狀況なり

○馬の飼育方

馬は我國の如く屋内に飼育するにあらずして毎日驅使したる後徹夜草原に放養するものにて翌朝に至り捕集するの例なり偖初め草原に放つや馬は草を搜し喰ふの爲め漸々「テント」を遠かり山又山を越へて遙かに遠隔の場所に在るものあれば毎朝之を捕ふるには長さは二三時間を要す而して之を捕集するにも馬は決して逃げ廻る等のことなく牙はお定まりの糧にありつかんことを欲するにより人の來るを見れば諸方より寄り來りて早く連れ歸られんことを待つもの、如しなほ之れ繫ぐには長き綱を張りて數條の

短き綱を幾所となく括り付け其れにて馬の足を繋ぎ合すの方なるが其時豫て用意の豆汁に麥焦しの粉を混ぜ合せ塊となしたるを喰はしめ馬の喰ひつゝある間に荷物を搭はし及び乘馬には靴を置き斯くして各自受持の五六匹づゝを追ひ其日の職業に就くのことゝせり

○一切藏經の事

一切藏經に二部あり佛部と言ひ祖部と言ふ前者(一百帙)はフッサ府ナルタン版を模寫して蒙古の寺院に販賣の目的を以て開放せられ北京にても之に由りて別にスンチユー版と言ふが行はれ現に我大谷派本願寺東京大學林等に藏するもの是なり祖部の藏經に至りては其の未だ日本帝國に傳へられざるは論なく之を藏むるものは倫敦と伯林との外にあらず其冊數は實に二百二十五帙の多きに上り日本の漢譯經典に錄せられざる秘冊を收めたり此の兩部を併せて彼國良好の用紙にて印刷したるものを求めんには概算約五千七百圓を要すべしと(經論は世界の寶典の項參照)

西藏內地の事情は以上にて終末を告げ以下經歷談中足らざるを補ひ以て此編を完結すべし

○郵船和泉丸中の二客

明治三十年七月六日日本より到れる郵船和泉丸は既に香港を發して西航す時に全船一等室に二客あり一は日本僧侶にして他は英國商人なり此の商人は久しく横濱に在留して巧に日本語を操り業餘好んで佛教の研究に從事したるタ、ムソンといふ人にて香港よ

り乘込めるにてありき其日彼は稍〻船暈に苦みたる樣子にて甲板にも逍遥せず食堂にも出でずして室内に悉縮してありしに翌七日午後には風波の漸く穩かなると共に甲板に上りて其隣室なる日本僧侶に挨拶してくさ〳〵の談話を始めぬ日本僧侶は彼の商人がポケットを探りて其同情を求めずはしげに絶へて久しく相見ざる故國の空に留まれる最愛の妻子が美しき寫眞を取出し示せると見て何を思ひけるや一滴の清き珠の目睫の間に宿れるを認めたりダムソン氏は好き談し對手を得たるを喜び「御身の鄕里氏名は何と呼び又御身が大旅行の目的は何なるや」を問ひ試みたるが此時日本僧侶ははふり落つる涙を拂ひて「貴下が故國に歸りて故國に待ち給へるいとし妻子の花の顏は船路の日子を期して笑ましげにぞ開きつらん彼が心の底深く想望する戀人こそ西藏の山深くに潜みてあるなれ知らず會合の期せらるべきか否を彼は和泉堺市の出身にて河

口慧海と名乘れり見らるゝ如く佛陀の光明を浴みてある身の此行若し大菩提を成就せずば二たび故國の父母親戚恩人朋友には見ざることこそ誓ひてあるなれ」と答へたるにダムソン氏は世にも不思議の面もちして「西藏の山深くにひそめりと宣ふその戀人の君とは」と慧海師の面をば見つめたり慧海師はさもこそと打頷きつゝ徐ろに其求めんとするところの尋常一樣にあらざるを說き更に聲をひそめて釋迦の遺經を探求せんとの意を漏らしたるにダムソン氏は口を極めて佛敎の取るに足らざる旨を縷說して措かず文明國民の信奉すべきは獨り基督の敎あるのみと言へるに師は遠航の船中徒然なるまゝに一辨一駁縱橫說破して餘蘊なかりければダムソン氏は終に不興氣なる面持して己が船室に立去りたりと

○カルカッタの數日間

慧海師は既に印度ベンゴル州の首府カルカッタに着し大菩提會に投ず會長ダンマヲ氏偶々布教の爲め米國に赴きて在らず留守主任チャンダヲーボース氏も其日は休みて錫蘭島の僧サッダーナンダーといふが懇ろに迎接して痛とまめやかに取賄ひけり一日を越へて二十九日チャンダヲーボース氏は出勤したり師は即ち就て入藏の大目的を語り且つ言へるやう「來航の途次新嘉坡に上陸して藤田領事を訪ひしに領事の語りけるは師よ果して何等の方便ありて入藏の大旅行を完うせられんとはする乞丐に身を窶さるゝか將た軍隊を率ひらるゝか二者以外に好手段あるべしと思はれず福島大佐（今の少將）の遠征に名あるを以てするも尚は且つダーヂリンより引き返されしと聞かれずや

云々（）稱之に答へていふ出家の身の乞丐姿何かは厭ひはべらん軍隊云々は思ひも寄らず如何の方便の求めらるべきかは水到りて渠の生ずるあらんのみと口に任して言ひ放ちしは今思ふて徒らに大言に過ぎたり貴下願くば稱の爲めに入藏の便りを計り給へかし」チャンダーボース氏は膝を拍ちて曰ふ「そは好き折にこそあれ茲に八ケ年の久しき西藏に留學して今は藏英字典の編述に忙はしき當國第一流の西藏學者にサラットチャンダヲダース氏といふがあり現に其の福島大佐の引返されしといふダーヂリンなる別墅に避暑してあれば貴僧の爲めに添書もて紹介せんは痛と易き業なり」との世にも情ある氏の厚意に慧海師は且つ喜び且つ謝しつゝに入藏第一の栞をぞ得たるなり

○ダージリンに向ふ

ダーヂリンは夫の名に高さ比馬拉の山中殆んど三分の一の高地たり氣候に應ずべき身仕度とその道の書籍を整ふるとに師は數日を費し八月二日午後四時の發車に乘り後れまじとて孤影飄然シャッチー停車場を後にして夕暮には疾やダマクヂヤといふ驛地に到着す此處は名にしおふガンヂス河の南岸にあり弦月の影に透して遙かに行く手を見渡せば比馬拉の山頂は何地見ゆらん混々漠々として涯知られぬ水の面は流れ緩かに星かとぞ見る對岸の火影を目當てに疾く滊船に乘りかへて一文字に河上を横ぎり北岸サヲの停車場に行き著きしは夜も次第に更けそめて月さへ西の野末に隱るゝ九時過ぐる頃なりき師の飛び乘りし滊車は再び進行を始めぬ北へ〳〵と唯だ一と筋に車輪は轉じて黑白も分かぬ車外の光景は何一つ旅路の鬱を慰むるよすがもなかりしにちら〳〵と飛び交ふ螢の痛と大きなるが風に飄へり露に零ちて美はしき光を放ちつゝ挪子の林

を照らし田面の水に映らふが見へそめたり、汝是畜生發菩提心、なれも御佛に捧ぐる法の光なれやとて轟々たる轍の響に和して高らかに師の唱ひけるは

御佛の光かくれし闇ながらなは照りませと飛ぶ螢かな

欣求大寶の修行には檀特山の山入に大恩教主は幾そばくその苦行をや積み給ひにけん今のわが身の悠々と夜滊車の乘客として寢はらばひつゝ道ゆく幸ある世の中に生れ合せたる冥加の程も恐ろしと慧海師は車窓の白むまで夜一夜まんぢりと夢だも得結ばず翌る三日の午前九時には比馬拉山下なるシリグリー停車場に著きぬこれよりダーヂリンまでは山路なは五十餘哩を剩せりアプト式に乘り換へてゆくてを急ぐに此日は天氣清朗にして空に一點の雲を駿さず列車は鬱たる深林中に入るかと思へば又乍ちにして一望快濶草花の異樣なるが一つらに美麗を敷さたらんが如き處に出づ機關車の響

か山彦の聲か絶壁の畔幽谷の阻圓線に由り折線を傳ひ軌道の紆曲せるは長蛇の大樹に纏へるに異ならず驚絶快絶神冷かに眼くるめき漸くにして海を拔く四千 呎の高所に近けば一抹の水煙溪間より立ち騰るよと見るうち黑雲濛々と全山に覆ひ重り箭を射る如き急雨は沛然と車室に吹込みぬバトラカエーラとて巨瀑の六條になりて瀉ぎ下れる奇境を過れば一天拭ふが如く雨雲は何地へ失せけん赫々たる日影は再び全山に照り渡れり一山の中晴雨時を定めず一日の間冷熱度を同ふせずカルカッタより三百八十餘哩の長程一晝夜をも費さず午後四時には早く既にダーヂリンにぞ到着しける

○慧海師が故國に發したる書翰

慧海師ダーチリンに在りて藏語の研修は日一日と其の歩を進め冬と暮れ春と明けて明

治三十一年七月二十日には早くもダーヂリンなる西藏印度國語高等學校の第四級（一級より九級までであり）半學年試驗に合格するに至りぬ斯くて藏語の修練其の度を加ふるにつけて師の心遣ひは入藏行の實程にぞある抑も入藏の旅行には瘴熱の氣に冒されんことを恐れて夏秋の二季を忌み冬春の二季は比較的安全なるを期し得べし唯だ其の準備に心すべきは防寒具の一事なり茲に師は其事情を物して故國に送り越しゝは

（前略）防寒具には西藏國風の僧服數多を要するを如何にせん是等の衣服は强固にして温暖なるものを要するが故に其價廉少ならず然して兼て貴居士等より受けし淨財は節約して今日までの修學費に供することを得たれど今は此淨財も盡さんとすヂツトチャンダヲーダース氏よりは今日までも日々の食物を供施せられ候に付かくては長日月の修學をもなし得し次第に候されども最早十二月までの學資を剩すのみ尤

も彼地ラッサ府に到着せば小衲の知己あり其名をハーラム、セー、クン、ヨといふ此人は西藏國法王の四攝政家中の一公子にして當年一月當地視察の爲に密行せし時喇嘛シャプトン氏の紹介にて遭遇せり……ラッサ府に到着せんには衣食住の三つは供施せんとて誓はれたり同府に到着の上は財を要することもなからん假りに此人に相遭ふの運びに至らざらんも彼國は佛教國なれば僧侶の生活には毫も難きを感せざるべしと存候へ共乞食をも爲し得られぬ山路の長旅行には是非とも旅費を要する次第にて是れ差當りての困難にて候云々(三十一年八月三日)

とて若干の淨財を得て其の外護に賴りいよ〳〵入藏の發程を期するを得んとぞ消息しける

○二通の紹介狀と三大寶

是より先師のダーヂリンにあるやチャンダヲダース博士の紹介に依りヂパール國總督の祕書官たるヂッパードル氏に會し西藏の名士に宛てたる二通の紹介狀を得たれば襲底深く之を藏め今又カルカッタ滯在中菩提會にてダンマパラ居士といふに面し居士より西藏國大法王に致すべく托されたる佛舍利、舍利塔、乃至梵語經典の三目を携へ此三大寶を齎さんは謂はゞ印度佛徒の使者たるに均し西藏の國禁如何に嚴なりとも誰か其交通を阻むべきものやあると喜び勇んで一月十九日午後九時半ハポラー停車場を發車し翌日午前十一時ガヤに着して一日下車し六哩を距つる佛陀迦耶の靈跡に辿り行きぬ此時ダンマパラ居士も同行なりしかば師は其夜居士と菩提樹下なる金剛道場に坐禪

して清月の下に世尊三千歳の古を觀じ翌二十一日の夜は百八燈を樹下に供して越山入藏の大修行を佛陀に告げこの功德に回向して旅行の安全を守らせ給へとこそ念じけれ

○セーラ大學堂

師が首府ラッサ府に入りて寄寓したるセーラ大學堂は定員五千五百人と限られたれど慧海師在學頃の學徒は約そ七千人に上れりと言へり斯くて師の修得せしところは小乘より始まりて唯心二派盤若中道派の講究に移り律部論部を修め灌頂秘密等の諸法は親しく大法王ギャルワ、リンポチェより授かりたる外大文典修辭學等をも研究し其餘暇貴族高官に交はりては彼國の組織、社會、文物、風俗のあらゆる方面に耳目を飛ばし兼ねては入藏行大目的の一たりし一切藏經購求の手段を完ふし得たりと言へり師は既

に關門入り易からざる藏都に入ることを得て身は大學堂の學徒たり數年の間は求法修業の至味を嘗むることを樂みけるに端なくも師が身邊に嫌疑の雲は覆ひ重りつ延いて其の知遇を得たる數多の高僧貴族高官の人々を罪過の淵に沈めんとする前兆の見えける程に今は躊躇して自ら危ふし他を累はすべきにあらずと覺悟を定め追捕の厄と破關の疑を被ることを遁れ雨期と瘴熱とを冒して晝夜兼行飛ぶが如くに故と來し道を履み分けダーヂリンには歸着したり師が入藏の逃懷に雪のみね氷の河を蹈み越えて妙の御法のくに〻入りけり

○發覺の原因は貴公子の口より出づ

師が國事探偵なりとの嫌疑を被りしは初め師のダーヂリンに在りて入藏後の施主と頼

み鄉里にまで言ひ送りたる彼の貴公子ハーヲム、セー、クシ、ヨといひしが歸藏の後ゆくりなくも師の日本人なる由を言ひ觸したるが原因にて貴公子が爾か語りたるを傳聞しては左らぬだに心を安んぜざりし師は一日も早くラッサ府を免れ去んとせし程に誰いふともなく日本は英國と同じく強烈の大國なりと聞く彼の僧實は僧侶にあらで僧風に擬したる日本政府の國事探偵者にぞあらんずらんとて口耳相屬するに至らんとしければ師は藏歷四月四日第二の大法王パンチヨン、リンポチエといふがツアン府なるタシレンプー大寺よりラッサ府に來錫し數日後ギャルワ大法王も別殿ノルブ、リンカより入府するに會して滿都の官民日月並照の歡びをなし歡迎聲裏に狂し復他を顧るの暇なき有樣なるを察して好機逸すべからずとなし依つて師は大學僧服のまゝ辛くもラッサ府を出奔して虎口を免るゝを得たるなりと

○チベール國王より贈られし佛典

師は言ふ若し今暫くラッサに滯在したらんには世界の秘密國又不思議國たる彼の國の高僧、貴族、大官等を勸誘して來朝せしむることもありしならんに一朝溟を呑んで藏都を去りしは頗る遺憾の極なりと而して今回師の携へ歸りし佛典中チベール國王より與へられたる梵語佛經四十一部と外に發見購求せし梵語中論並に同楞伽經の二部及佛教歷史、高僧傳記等秘書の重なるものは雪山の强力三人の荷物として印度カルカッタに送り出すことを得たるも其の素望たる緊要の西藏一切藏經を購買することを得ざりき此經典は全帙の價五千七百圓と稱し今藏經の祖部は倫敦に一部伯林に一部を有するのみにて亞細亞學會に藏せるものさへ此れを欲げり而して我日本に傳はりし藏經は數

古の寺院にありしものを販賣の目的にて北京に再版せられたるものなるを以て誤脫頗る多しと

○經論は世界の寶典

佛教の經論は世界寶典の一なり初め釋迦の說けりしところは當代の俗語たるガーダ（伽陀語）に由りて誌されたりしを一たび其の漢土に傳はるに至りて難澁解し易からざる漢文に翻譯せられ而してこれを我國に傳ふるに及べり今日原語ガーダの經論を把り直にこれを我國語に翻譯せんとするも其の我邦人に適切ならざる小乘なるを免がれず然るに西藏の大乘佛教國たることは洽く世に認識せらるゝところにして西藏に存在する經論の多くは梵語藏語との對譯にして釋迦の直說に係るもの百八帙、釋迦の弟子

其他高僧の說くところのもの二百二十五帙（一帙は漢本二三十卷に當る）を儼存し中には未だ漢語にすう翻譯せられざるあり其貴重にして而かも適切解し易き到底漢譯のものゝ比にあらずと師が苦辛慘澹は既に其寶典を歸來せらるべかりしを一蟻穴の爲めに志を遂ぐるに至らざりしは遺憾なりとす

○慧海師旅行中の偶感

陰曆六月十四日の夜月は皎々とし漠々たる曠野を照らし向ふの方朧ろに雪の山は白く光かつて居る

座禪をば高根が原の草の上行來の人を深山木にして

次にまた

苦しめるわれもなき身の雪の原法の光に解くる心は

マナサルワ湖の絶景に就て

東なる八咫の鏡を雪山の阿耨達池に見るは嬉しも

ヒマラヤのチーセの峯の清きかな阿耨達池に影を宿せば

ヒマラヤのマナサルワ湖に宿りける月は明石の浦の影かも

陰暦六月十六日寒夜高原に宿りて

虫の音も人聲もなき高原におとなふ月の友はたゞわれ

眼病雪夜高原に惱みて

雪の原ゆきをしとねの雪枕雪を食ひつゆきになやめる

カルカッタを發して藏途に上れるのとき

空の屋根土をしとねの草枕雲と水との旅をするなり

大秋國 西藏探險終

明治三十六年七月八日印刷
明治三十六年七月十日發行

大阪南區餌谷仲之町二百八十九番邸
編纂兼發行者　林久壽男

大阪市南區末吉橋通四丁目十六番地
印刷者　井下幸三郎

不許復製

發賣所　大阪南區心齋橋安堂寺町西入
又間精華堂
（電話東三三六三番）

葛城天華著

朝鮮半島豪傑的旅行

定價金貳拾五錢
郵税金四錢

文壇に志を得ざる一青年あり滿腔の不平に驅られて僅に四拾錢を懐にしたるのみ飄然として都門を去り卒如として大阪に現る其旅程既に奇也轉じて足を東亞の一角に觸るや豪宕の快擧は忽として彼の手に出でぬ然も一敗地に塗れ奔つて清領滿洲に入り今其生死を審にせず經歴者の知己葛城天華君其不遇に同情して其經歴を編みて書とゐす卽是ゐり奇行快談卷に横逸して時に失笑すべく是に扼腕すべし眞に近來の快文字

發行元　大阪市心齋橋筋安堂寺町西入（電話東三三六三番）　又間精華堂

近刊豫告

葛城天華著

戀愛の研究

定價金參拾錢
郵稅金四錢

今日に於て戀愛の神聖を言ふが如きは抑も迂なり然るも世人の多くは戀の本體を誤解して輒すれば劣情と混ず爲に世の少年少女を誤るや久し戀愛の研究は即這個の解決をなして是を江湖に披瀝したるもの也所旨平易にして穩健引例摯實にして趣味に富む世の汚き戀に醉へるもの淸き戀に煩悶せるもの共に來つて茲に慰藉を求めよ

發行元 大阪市心齋橋筋安堂寺町西入（電話東三三六三番） 又間精華堂

65

026627-000-8

96-284

西蔵探検（大秘密国）

河口　慧海／述

M36

ADD-0312